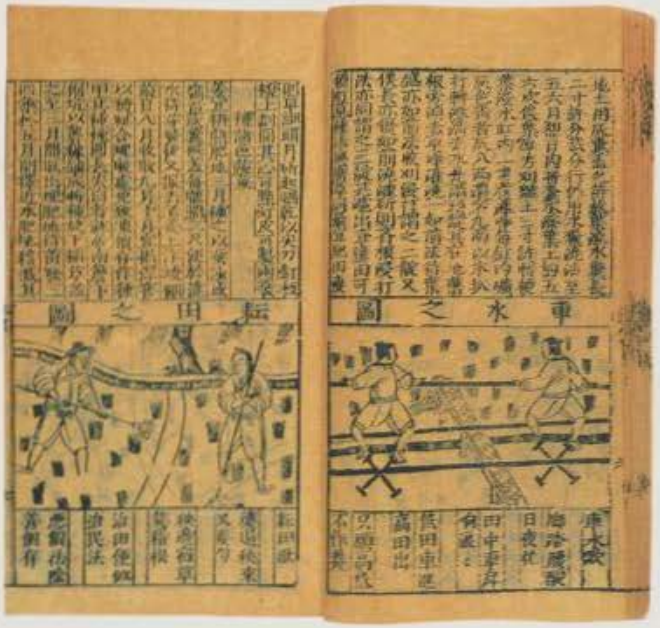
東洋文化研究所
受
2001.4.10
贈
図書室資料

東京大学
東洋文化研究所
要覧
2000



『萬寶全書』（明艾南英撰、崇禎元（1628）年、存仁堂）

東京大学東洋文化研究所
6413042828

C3
45
2000

東京大学
東洋文化研究所
要覧

2000

東京大学東洋文化研究所

イエメン：ワーディー・ダハル
ダール・アル＝ハジャル（岩の宮殿）

「同治十年辛未九月　日中北面直洞田畓打量案」
朝鮮王朝時代に作成された量案（土地台帳）で，1871年作成。中北面直洞は慶尚道彦陽県に属した。

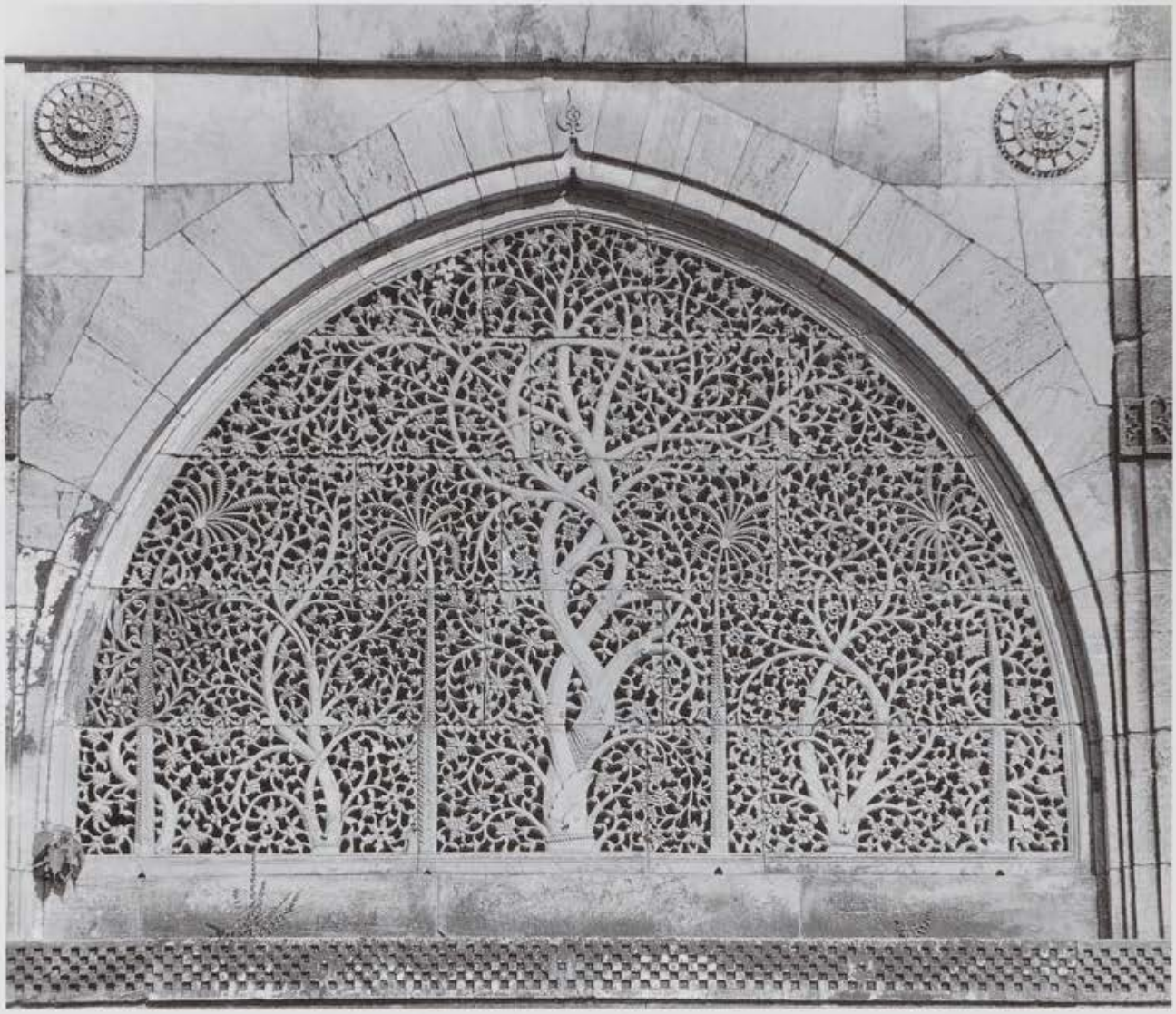
萬寶全書（明艾南英撰，崇禎元〈1628〉年，存仁堂）

クチャ（西域北道）キジル石窟菩薩像頭部
菩薩の宝冠部分から胸上部までで，周囲の損傷は激しいが幸い顔貌を中心に表面が残っている。キジル壁画第二期の特徴を有している。

オロン・スム出土の彩釉鬼瓦下顎（中国・内モンゴル自治区，元代）
1935，39，41年の，江上波夫氏らによる調査において採集された。先に破片の一部が報告されているが，近年の再整理で破片数点が接合し，下顎全体の形が明らかになった。

ナスィールッディーン・トゥースィー（1274 没）著
（クーシジー（1474 没）注釈付載）『神学綱要』の 19 世紀初頭のアラビア語写本

東京大学インド史蹟調査団写真資料
フィルムとベタ焼きが保存され，4×5，6×9，6×6，35 mm など，総計 40,000 カットを超える



アーメダーバードにあるシディ・サイイド・モスクの石製打ち抜き窓（東京大学インド史跡調査団による）

第一次范の一例（青銅製）

陶模の一例

第二次次范の一例（陶製）および五銖銭

［漢唐五銖銭の范と模］
貨幣はまず第一次范をつくり，これから模をとり，模からさらに第二次范をつくり，それに青銅を流し込んで貨幣をつくる。第二次范はそのつど破壊される。模から始まる場合もある。

中国・海南島黎人の伝統的家屋作り
（2000年2月撮影）

中国・上海の闇コオロギ売り（1996年7月撮影）

花嫁は，伝統的な結婚儀礼の前に，家の神々を礼拝する。インド・ビハール州
（1998年3月撮影）

アブドゥルラフマン・ワヒッド現インドネシア大統領（写真中央，当時はイスラム教社会団体ナフダトゥル・ウラマ議長）らと記念撮影する本研究所加納啓良教授（左端，1999年6月，ジャカルタの日本料理屋「よしこ」で）

スハルト元大統領との読売新聞インタビューを通訳する本研究所加納啓良教授（1999年4月，ジャカルタのスハルト元大統領私邸で，読売新聞社提供）

目　次

序

Ⅰ　沿　　革 …… 1

Ⅱ　組　　織 …… 5

Ⅲ　職　　員 …… 9

Ⅳ　財　　政 …… 15

Ⅴ　施　　設 …… 17

Ⅵ　図書・資料 …… 19

Ⅶ　研究・教育活動 …… 25

A　部門研究 …… 25

B　長期国際共同研究 …… 30

C　班 研 究 …… 31

D　定例研究会 …… 45

E　学術研究・調査 …… 46

F　国際・国内学術交流 …… 55

G　学内教育参加 …… 62

H　刊行物一覧 …… 65

I　執筆著書・論文等総数　受賞 …… 73

Ⅷ　所員の活動 …… 75

Ⅸ　附属東洋学研究情報センター …… 121

序

2001年11月には，東洋文化研究所は還暦をむかえる。昭和16年に東京帝国大学に附置されてからいよいよ60年という時間が経過したことになる訳だ。設立当初の東アジア中心の研究から現在は東・南・西アジアというユーラシア大陸のほぼ大半を対象とするまでに，研究所の研究領域は拡大してきた。この間，日本のアジア研究の種々の領域において，東洋文化研究所は多大の学問的貢献を行ってきた。その成果も高く社会的に評価され，小規模の大学附置研究所としては他に類をみない程，文化勲章，文化功労者そして学士院賞受賞者を数多く輩出してきた。単にその直接の研究領域である東洋文化研究という範囲をこえて，我が研究所の活動は人文社会科学全体に対しても大きな知的貢献をしてきたと自負しても過言にはならないであろう。

現在，本東洋文化研究所の研究スタッフは，対象とする地域・時代そして専門領域の点で実に多様である。東アジアから西アジア・中央アジアまでを対象とし，時代も古代から現代までとなっており，また文献学から現地調査といった風に，その接近方法も多様である。わが国全体を見渡しても，これ程多様な専門家を同じところに擁している研究機関は他にはない。こういう多様性が，当研究所の研究活動を要約してわかりやすく説明することを困難にしていることも事実である。

しかし，所内において，各個人の研究はゆるやかに結合している。その結合の要は，古典研究と現代研究とを有機的に関連づけようとする研究方法の共有である。それはまさに，多様性のなかに統一を求めようとするものである。多相性をはっきりと認識してアジア研究を組織化していくことは非常に大きな力となりうるものである。所内で育ててきたこのネットワーク型研究方法を，国内外にまでひろげかつその結び付きを深めることで，本研究所を世界のアジア研究の代表的センターとして強化していく。これが，東洋文化研究所の将来構想の変わらぬ中核である。

ところで，過去2年の間に国の行政改革の一環として，国立大学の設置形態の変更が大きな問題として登場してきた。特に，国立大学を行政法人に移行させる

という方針である。国立大学全体，そして東京大学自体が独立行政法人化されるか否かは，現時点では定かではない。しかし，学術研究が社会のきびしい評価にさらされることになることだけは確実である。研究者が仲間内での評価だけに依存していられる時代は，もはや過去のものとなった。自らの研究活動のアカウンタビリティや透明性をたかめる仕組みを，作り出していかなければならない。自らの研究のもつ社会的意義を，我々ひとりひとりが真剣に問わざるをえない状態になっている。

最新の学術審議会報告「科学技術創造立国を目指す我が国の学術研究の総合的推進について」が強調しているように，大学等の研究機関は，それぞれに与えられた固有の役割と使命とをあらためて吟味して，その特色を生かす組織・活動の形態を模索していかなければならない。特に，東洋文化研究所を含む大学附置の研究所がおかれている状況はきびしい。附置研究所は，教育負担を軽減し，特定の研究領域に特化して，あるいは新たな研究領域の開拓を目指して集中的に研究を深めるところに，その存在意義がある。従って，その研究成果は，学部・大学院よりは，よりきびしい外部評価にさらされることになる。附置研究所は，その特定領域において，我が国だけでなく世界のなかで，その研究に関して中核性を発揮してはじめて，その存続が可能となる。中核性を失っている場合には，廃止ということも充分にありうることになろう。

1999年2月に行われた第2回外部評価では，我が研究所が「個人ごとにネットワークを持つ優秀な研究者の集合する場所」として機能してきたことは充分に認められた。しかし同時にそれが機関・組織としての性格を曖昧にしていること，ならびに各研究者の甘えが容認される危険性をはらんでいることに，きびしい注文がつけられた。

さて，学術審議会報告は，人文・社会科学の分野に関して次のように地域研究の重要性を指摘している。「地域研究は，世界の諸地域についての人類の営みに関わる諸事象を総合的に把握して地域の全体像を理解することを目的とする複合領域研究であり，人文・社会科学の研究の理論・方法・体系に新しい刺激を与え，学問の統合や再編を促す可能性を持っている」と。東洋文化研究所の組織としての研究方向を，「地域研究」という概念でくくるべきか否か。この点については，研究所内部において明快な認識の一致はない。しかし，「東洋（アジア）文化の総合的研究」がそのミッションである限り，東洋文化研究所の研究が広い意味での地域研究に属することは否定出来ない。そうである以上，東洋文化研究所の研究活動を，人文・社会科学研究全体に対して新しい刺激を与える方向に意識的に再編成していかざるをえないであろう。還暦をむかえた後の東洋文化研究所の将

来は，この方向以外にはありえないのではなかろうか。

2000年4月

所　長　原　洋之介

I 沿 革

1. 略 史

【研究部門】

本研究所は1941年11月26日，東洋文化の総合的研究を目的として，東京（帝国）大学に設置創設された。哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門という部門体制で，附属図書館内に研究室，書庫，事務室を置いて発足した。1949年，新たに3部門が増設されたのを機会に研究組織を細分化し，哲学・宗教部門，文学・言語部門，歴史部門，美術史・考古学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し，これまでの附属図書館内研究室を分室として，研究の充実・発展をはかった。

ついで1951年，人文地理学部門と文化人類学部門が加えられた。これを契機として，従来の諸科学の専門体系による部門構成を，汎アジア経済部門，汎アジア人文地理学部門，汎アジア文化人類学部門，東アジア政治・法律部門，東アジア歴史部門，東アジア美術史・考古学部門，東アジア哲学・宗教部門，東アジア文学部門という地域区分を加味した8部門に再編成した。地域部門の充実をはかる将来計画にもとづいて，1960年には南アジア政治・経済部門，1964年には東北アジア部門，1968年には西アジア歴史・文化部門，1973年には東南アジア経済・社会部門，1978年には西アジア政治・経済部門が増設されて，ようやく13部門を擁するにいたった。

さらに，アジア地域全体が世界のなかでしめる重要性が大きくなったことが明らかになったのに対応させて，本研究所がわが国のアジア研究の中枢的，指導的役割を果すために，研究内容の充実，規模の拡大を含む組織上の再編成を行うことが必要となった。そこで，1981年より新しい構想に基づく大部門制を採用し，これまでの13部門を，汎アジア部門，東アジア部門，南アジア部門，西アジア部門の4部門に統合して再出発し，今日にいたっている。

【附属東洋学研究情報センター】

1999年度に，東洋学文献センターを廃止して，比較文献資料学と造形資料学という2つの分野から構成される東洋学研究情報センターが新設された。1966年の設立以来東洋学文献センターが実施してきた文献資料に関するドキュメンテーション業務は，アジア全域の文献を対象とする比較文献資料学分野に引き継がれる。さらに，アジア文化研究にとって不可欠な絵画・考古資料等を対象とする造形資料学分野が新しく追加された。この両分野での研究成果を，アジア研究のための基礎的研究情報として世界に発信していく計画である。なお，この新設にともない，国内客員教授が1ポスト配置された。

【建物】

創立以来23年にわたって，本研究所は附属図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが，1967年に，本郷構内に総合研究資料館との合同庁舎が完成し，5階以上を本研究所が使用することになった。

しかしその後，研究組織の拡充，研究活動の多様化，図書・資料の増加などにともない，狭隘な施設の改善，とくに書庫の緊急な増設等の強い要望があり，1983年にいたって総合研究資料館との交換分合により，本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これにともなって全面的に改修工事を行い，1984年3月に工事が完成し，本研究所の建物総面積は6,577平方メートルで，地下1階より地上8階までとなった。3階までを所長室，事務室，図書館，附属東洋学研究情報センター，会議室等とし，3階の一部と4階以上は各研究部門の研究室である。なお地下から8階まで（2階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。また，1995年には旧東方文化学院前の獅子像が大塚から東洋文化研究所に移設された。

2. 研究活動と将来計画

【研究所の特色】

対象地域は，東から西アジアまでとほぼユーラシア大陸の過半となっているし，また研究対象も考古から現代研究，人文科学から社会科学まで含んでいる。我が国では他に類がないこういう幅広い範囲を研究対象として，本研究所の研究者は各自の専門に従った課題のもとに個人研究を進めている。同時に，各専門分野の孤立を避け，アジア諸地域の総合的研究を推進するという本研究所本来の目的を達成するために，共同研究会や各種研究班を組織化して学際的研究を育ててきて

いる。また研究陣容の補強を図るため，学内外の専門分野の研究者に研究を委嘱し，協力を求める方針をとってきた。本学の他の部局ならびに他大学等でのアジア研究と比較して，本研究所の研究の特色を述べるならば，それは文献研究と現地調査を有機的に結合させた，古典研究と現代研究との統合と表現できる。

【長期計画研究】

以上のような特色ある研究をより深めるためには，研究所としてまとまりのある研究プロジェクトが必要である。1993年度から10年計画で，研究所をあげて取り組む二つの研究プロジェクトを設定した。一つは，「激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究」であり，他の一つは，「中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究」である。また少しおくれて，1996年度から第三の長期計画研究プロジェクトとして，「環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動」を進めている。これらの研究プロジェクトは，本学の他部局や他大学・研究所等の研究者，そして海外，なかんずくアジア諸国の研究者の協力を得て行われている。このような長期にわたる大規模な研究のためには，必要な予算を確保することと同時に，研究人員の確保が重要である。多様な資金源を動員してアジア諸国の研究者を招聘して研究計画を推進させているが，同時に，研究のネットワークを恒常化させるために，外国人客員部門の新設を求めている。

【研究体制の将来計画】

本研究所のこれまでの研究蓄積を踏まえ，21世紀におけるアジア研究の課題を見通す議論を深め，その中で，研究・情報センターとしての研究所の体制を整えていくことが重要と判断していた。幸いなことに，前述の通り，アジア研究に関する多様な情報を世界中に発信しうる東洋学研究情報センターの設立が実現した。

1998年後半から準備を開始し，海外からの研究者の参加も得て，1999年2月末にかけて第2回外部評価の作業がおこなわれた。1995年から1996年にかけて実施された第1回の外部評価で指摘された問題点を中心に外部評価作業を行ってもらった。そこでは，研究者個人の発意をもとにした研究所の研究体制は肯定的に評価されたが，同時に共同研究の組織化や研究資・史料の蓄積・公開に関して問題点が残されていることが鋭く指摘された。

【海外研究拠点】

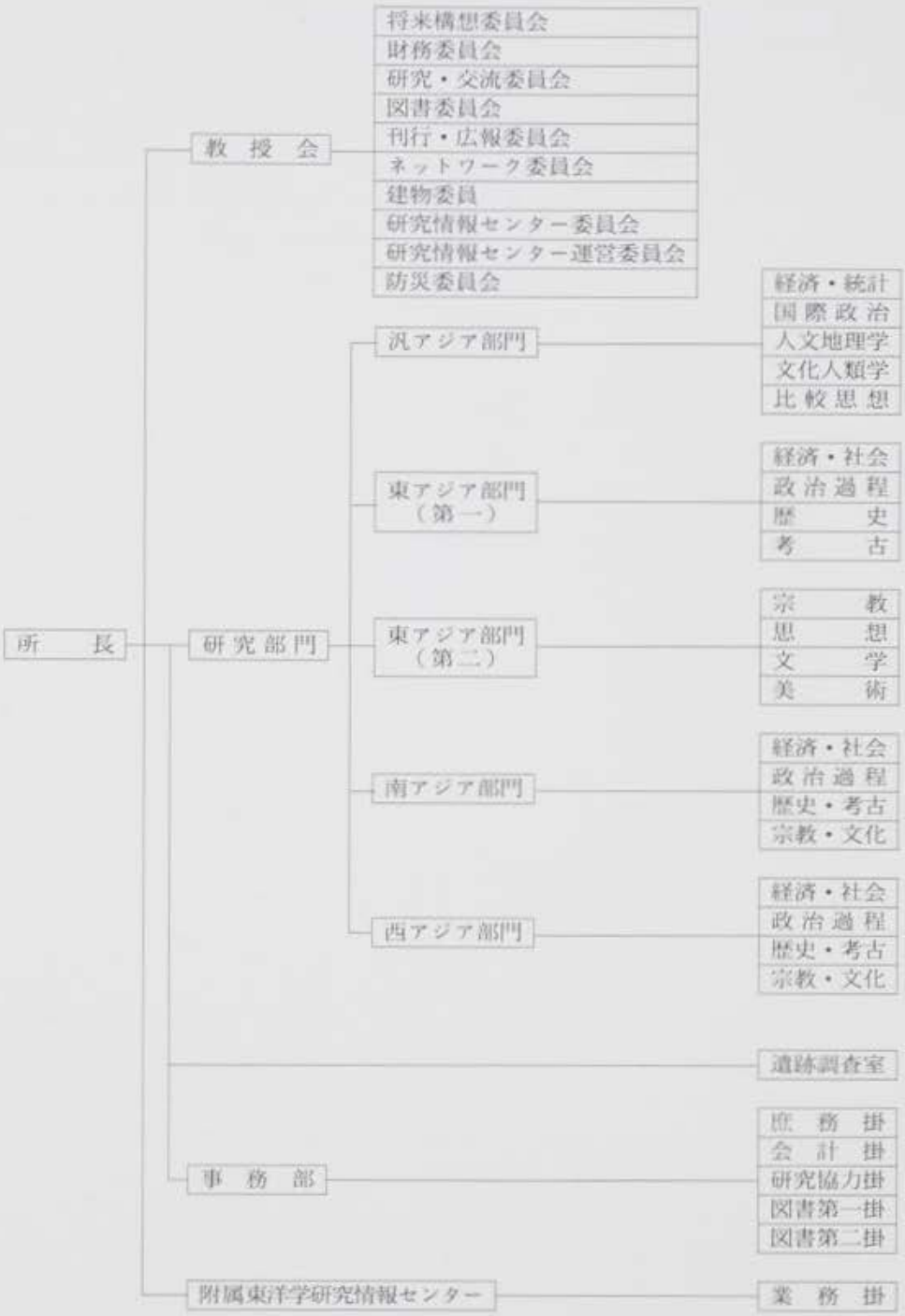
以上のような研究計画を実り豊かなものにするためには，現地定着型の研究を組織することが必要であるが，そのために本研究所は海外研究拠点を作ることを構想してきた。その最初の試みとして，1995年10月に香港大学アジア研究センターと学術交流協定を締結し，主として中国を軸とする長期計画研究に関する共同研究をスタートさせた。交流協定は，(1)共同研究の実施，(2)学者・研究者の相互訪問，(3)資料および研究情報の交換，を柱としている。更に，1997年度に入り，シンガポール大学社会学部と同様な学術交流協定を結び，環ベンガル湾地域をにらんだ共同研究をスタートさせた。

こういう成果をふまえて将来計画としては北京，デリー，イスタンブール，アンマンなどを有力な候補地として考え，研究拠点設置と研究ネットワーク形成を構想している。

【大学院教育】

東京大学の大学院構想が実施されていく中で，大学附置の研究所は研究所講座として大学院教育にかかわることになった。その設立当初から若手研究者の育成をアジア研究の重要な一貫として位置付けてきた本研究所は，アジア地域の比較論・関係論を中心とする新たな大学院研究科ないしは専攻の設置を構想してきた。情報学環の新設に本研究所として協力するとともに，大学全体での将来構想の作成に積極的に参加して，この構想を実現すべく努力をつづけていきたい。

II 組織


所長
教授会
将来構想委員会
財務委員会
研究・交流委員会
図書委員会
刊行・広報委員会
ネットワーク委員会
建物委員
研究情報センター委員会
研究情報センター運営委員会
防災委員会
研究部門
汎アジア部門
経済・統計
国際政治
人文地理学
文化人類学
比較思想
東アジア部門（第一）
経済・社会
政治過程
歴史
考古
東アジア部門（第二）
宗教
思想
文学
美術
南アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
西アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
遺跡調査室
事務部
庶務掛
会計掛
研究協力掛
図書第一掛
図書第二掛
附属東洋学研究情報センター
業務掛

【歴代所長】

氏名	在職期間
桑田　芳蔵	1941.11.26－43. 3.31
宇野　圓空	1943. 4. 1－46.10. 5
戸田　貞三	1946.10. 6－47. 9.30
辻　直四郎	1947.10. 1－54. 3.31
仁井田　陞	1954. 4. 1－58. 7.10
飯塚　浩二	1958. 7.11－60. 7. 9
結城　令聞	1960. 7.10－62. 7. 9
江上　波夫	1962. 7.10－64. 7. 9
飯塚　浩二	1964. 7.10－65. 2.28
小口　偉一	1965. 3. 1－66. 3.31
川野　重任	1966. 4. 1－68. 3.31
小口　偉一	1968. 4. 1－70. 3.31
泉　靖一	1970. 4. 1－70.11.15
川野　重任	1970.11.16－70.12.17
（事務取扱）鈴木　敬	1970.12.18－72. 3.31
荒　松雄	1972. 4. 1－73. 3.31
窪　徳忠	1973. 4. 1－74. 3.31
佐伯　有一	1974. 4. 1－76. 3.31
大野　盛雄	1976. 4. 1－78. 3.31
深井　晋司	1978. 4. 1－80. 3.31
中根　千枝	1980. 4. 1－82. 3.31
大野　盛雄	1982. 4. 1－84. 3.31
尾上　兼英	1984. 4. 1－86. 3.31
山崎　利男	1986. 4. 1－88. 3.31
斯波　義信	1988. 4. 1－90. 3.31
池田　温	1990. 4. 1－92. 3.31
松谷　敏雄	1992. 4. 1－94. 3.31
後藤　明	1994. 4. 1－96. 3.31
濱下　武志	1996. 4. 1－98. 3.31
原　洋之介	1998. 4. 1－現在

【名誉教授】

氏名	称号授与
江上　波夫	1967. 5
川野　重任	1972. 5
窪　徳忠	1974. 5
鈴木　敬	1981. 5
荒　松雄	1982. 5
山田　三郎	1992. 5
大野　盛雄	1985. 5
松井　透	1987. 5
中根　千枝	1987. 5
尾上　兼英	1988. 5
鎌田　茂雄	1988. 5
山崎　利男	1990. 5
板垣　雄三	1991. 5
池田　温	1992. 5
田仲　一成	1993. 5
友杉　孝	1993. 5
松丸　道雄	1995. 5
松谷　敏雄	1997. 5
蜂屋　邦夫	1999. 5

【歴代事務長】

氏名	在職期間
山高　力三	1941.11.27－42. 9.30
根本　喜蔵	1942.10. 1－44. 7. 9
長内太郎吉	1944. 7.10－54. 7.15
工藤松之助	1954. 7.16－63.10.31
宮本　健	1963.11. 1－69. 2.28
新井　康次	1969. 3. 1－74. 3.31
斎藤　益	1974. 4. 1－77. 6.30
三浦　晧守	1977. 7. 1－81. 3.31
伊藤秀三郎	1981. 4. 1－83. 3.31
岡部　藤男	1983. 4. 1－86. 3.31
木内　義一	1986. 4. 1－90. 3.31
江澤　兵治	1990. 4. 1－92. 6. 1
石川　純男	1992. 6. 1－95. 3.31
千葉　勝志	1995. 4. 1－97. 3.31
小林　邦男	1997. 4. 1－99. 3.31
石井　金夫	1999. 4. 1－現在

【歴代受賞者】

本研究所の教官の文化勲章・文化功労賞・学士院賞の各受賞者は次の通りである。

文化勲章	江上　波夫	1991年
文化功労者	辻　直四郎（併）	1978年
	江上　波夫	1983年
	山本　達郎（併）	1986年
	川野　重任	1993年
	中根　千枝	1993年
学士院賞	仁井田　陞	1934年
	宇野　圓空	1942年
	山本　達郎（併）	1952年
	周藤　吉之	1956年
	福島　正夫	1963年
	鎌田　茂雄	1976年
	荒　松雄	1978年
	池田　温	1983年
	鈴木　敬	1985年
	田仲　一成	1993年

Ⅲ　職　員（2000年4月1日現在）

所　長　　原　洋之介

汎アジア部門

原　洋之介	教　授（710室）
池本　幸生	助教授（707室）
猪口　　孝	教　授（702室）
田中　明彦(併)	教　授（708室）
原田　至郎	助　手（413室）
松井　　健	教　授（703室）
菅　　豊	助教授（711室）
関本　照夫	教　授（712室）
名和　克郎	助教授（307室）
岡本　サエ	教　授（305室）

東アジア部門（第一）

濱下　武志(併)	教　授（411室）
高見澤　磨	助教授（403室）
黒田　明伸	助教授（402室）
平勢　隆郎(併)	教　授（407室）
甘　　懐真	助教授（408室）

東アジア部門（第二）

丘山　　新	教　授（508室）
橋本　秀美	助教授（502室）
尾崎　文昭	教　授（511室）
小川　裕充	教　授（510室）

南アジア部門

加納　啓良	教　授（607室）
高橋　昭雄	助教授（610室）
柳澤　　悠	教　授（603室）
上村　勝彦	教　授（602室）
永ノ尾信悟	教　授（611室）

西アジア部門

鈴木　　董	教　授（803室）
長澤　榮治	教　授（811室）
羽田　　正	教　授（807室）
桝屋　友子	助教授（810室）
後藤　　明	教　授（808室）
鎌田　　繁	教　授（802室）
森本　一夫	助　手（812室）

附属東洋学研究情報センター

センター長	原　洋之介（併）	
センター主任	中里　成章	（608室）
教　授	宮嶌　博史	（410室）
助教授	板倉　聖哲	（306室）
客員教授	深見奈緒子	（813室）
助　手	鈴木　隆泰	（512室）

研究機関研究員*

菊地　達也
小泉　龍人
戸田　裕久
陶安あんど
張　　欣

非常勤講師*

小川　　隆
小泉　龍人
小林　春男
篠原　　徹
清水　和裕
杉野　　実
檜垣　泰彦
深見奈緒子
三沢　伸生
廖　赤　陽
金田　真滋
金　　漢益
青山　　亨
土屋　昌明
大石　高志
山口　昭彦
藤井　守男
森　　洋久
陳　　捷
嶋　陸奥彦

*1998～2000年度

事務部

事務長	石井　金夫
総務主任	守屋　勝國
図書主任	笠原昌一郎

庶務掛

庶務掛長	大澤　悦子
庶務掛主任	益子　一郎
事務官	中井　珠美

会計掛

会計掛長	穴沢伸一朗
会計掛主任	三浦　弘三
事務官	割田　秀彦

研究協力掛

研究協力掛長（併）	守屋　勝國
研究協力掛主任	竹澤　融

図書第一掛

図書第一掛長	飯野　洋一
事務官	神田百合枝
事務官	渋谷　義治

図書第二掛

図書第二掛長	岩渕　玲子
事務官	新居　彌生
事務官	長野　真
事務官	笠井　伊里
事務官	山口　淳

業務掛

業務掛長	佐々木郁子
事務補佐員	清水　裕子

遺跡調査室

技官	野久保雅嗣

職員数（2000年4月1日現在）

教　授　19名　　助教授　10名　　助　手　3名

事務官　19名　　技　官　1名

教職員の異動等（1998年5月～2000年4月）

（教官）

1999. 3. 31	教　授	蜂屋邦夫	停年退職
1999. 4. 1	助教授	平勢隆郎	教授（東アジア部門）に昇任
1999. 4. 1	助　手	井坂理穂	大学院総合文化研究科講師に昇任
1999. 4. 1		桝屋友子	助教授（西アジア部門）に昇任
1999. 4. 1		板倉聖哲	助教授（附属東洋学研究情報センター）に採用
1999. 4. 1	教　授	中里成章	附属東洋学研究情報センターに配置換
1999. 4. 1	教　授	宮嶌博史	附属東洋学研究情報センターに配置換
1999. 4. 1	助　手	鈴木隆泰	附属東洋学研究情報センターに配置換
1999. 4. 1	教　授	岡本サエ	汎アジア研究部門に配置換
1999. 5. 18	元教授	蜂屋邦夫	名誉教授の称号授与
1999. 9. 1		甘　懐真	助教授（東アジア部門）に採用
1999. 10. 1		菅　　豊	助教授（汎アジア部門）に転任
1999. 10. 1		深見奈緒子	客員教授に採用
2000. 3. 31	助教授	厳　　鋒	任期満了により退職
2000. 3. 31	助　手	吉開将人	退職
2000. 4. 1		橋本秀美	助教授（東アジア部門）に採用
2000. 4. 1		名和克郎	助教授（汎アジア部門）に採用

（事務官）

1999. 4. 1	事務長	小林邦男	医学部医学系研究科事務長に配置換
1999. 4. 1	総務主任	風間正之	教育学部附属高等学校・中学校事務主任に配置換
1999. 4. 1	図書主任・図書第一掛長	秋山　紀	社会科学研究所図書主任に配置換
1999. 4. 1	会計掛長	坂井誠吾	農学系総務課獣医学・応用動物科学系事務主任に配置換
1999. 4. 1	業務掛長	金子俊明	東京学芸大学附属図書館情報サービス課参

考調査係長に転任

1999. 4. 1 会計掛　丸山信明　福島工業高等専門学校会計課に転任

1999. 4. 1 工学部工学系研究課教務課長　石井金夫　事務長に配置換

1999. 4. 1 農学部附属牧場総務主任・管理掛長　藤枝優一　総務主任に配置換

1999. 4. 1 附属図書館情報管理課管理目録主任　笠原昌一郎　図書主任・図書第一掛長に配置換

1999. 4. 1 教育学部附属高等学校・中学校庶務掛長　穴沢伸一朗　会計掛長に配置換

1999. 4. 1 史料編纂所図書整理掛長　佐々木郁子　業務掛長に配置換

1999. 4. 1 芳賀満子　附属東洋学研究情報センター業務掛に配置換

1999. 4. 1 新居彌生　附属東洋学研究情報センター業務掛に配置換

1999. 6. 1 総務主任　藤枝優一　研究協力掛長に併任

1999. 6. 1 図書主任・図書第一掛長　笠原昌一郎　図書第一掛長の併任解除

1999. 6. 1 調査掛長　飯野洋一　図書第一掛長に配置換

1999. 6. 1 庶務掛国際交流主任　結城剛吉　研究協力掛主任に配置換

1999. 10. 1 医学部附属病院管理課用度第二掛　割田秀彦　会計掛に配置換

2000. 3. 31 研究協力掛主任　結城剛吉　定年退職

2000. 3. 31 業務掛　芳賀満子　定年退職

2000. 4. 1 総務主任　藤枝優一　分子細胞生物学研究所庶務主任に配置換

2000. 4. 1 庶務掛長　柳沢賢次　教養学部等総務課数理科学総務掛長に配置換

2000. 4. 1 図書第二掛長　合田晃一　附属図書館情報サービス課参考調査掛長に配置換

2000. 4. 1 庶務掛　塚本晶子　理学系研究科等事務部人事掛に配置換

2000. 4. 1 地震研究所総務主任・庶務掛長　守屋勝國　総務主任・研究協力掛長に配置換

2000. 4. 1 総務部総務課広報室広報掛長　大澤悦子　庶務掛長に配置換

2000. 4. 1 国立婦人教育会館情報交流課情報掛長　岩渕玲子　図書第二掛長に配置換

2000. 4. 1 農学部附属牧場事務室主任　竹澤　融　研究協力掛主任に配置換

2000. 4. 1 史料編纂所　庶務掛　中井珠美　庶務掛に配置換

2000. 4. 1 新居彌生　図書第二掛に配置換

Ⅳ 財 政

1. 校 費

年度	決算額（千円）	年度	決算額（千円）	年度	決算額（千円）
1994	165,664	1996	198,800	1998	198,365
1995	185,313	1997	171,941	1999	175,891

2. 科学研究費補助金

1998年度			1999年度		
研究種目	交付決定額（千円）	件数	研究種目	交付決定額（千円）	件数
基盤研究（A）（1）	3,100	1	基盤研究（A）（1）	5,800	1
			基盤研究（A）（2）	1,400	1
基盤研究（B）（2）	5,700	3	基盤研究（B）（2）	8,700	3
基盤研究（C）（1）	1,200	1	基盤研究（C）（1）	1,100	1
			基盤研究（C）（2）	1,900	1
特定領域研究（A）(1)	17,400	2	特定領域研究（A）(1)	19,200	2
特定領域研究（A）(2)	1,200	1	特定領域研究（A）(2)	10,200	5
萌芽的研究	600	1			
奨励研究（A）	1,500	2	奨励研究（A）（2）	2,000	2
			特別推進研究（2）	18,000	1
特別研究員奨励費	7,700	9	特別研究員奨励費	14,000	15
国際学術調査（学術調査）	11,300	2			
合 計	49,700	22	合 計	82,300	32

3. その他の経費

以上のほか，「Ⅶ　E　学術研究・調査」の項で後述するように，以下の財団より研究助成を受け入れた。

順益台湾原住民博物館林迺翁文教基金会

トヨタ財団

三菱財団

V 施 設

1. 建 物

1941年11月	東京帝国大学附属図書館内に新設
1948年 9月	文京区大塚町56旧東方文化学院建物に移転。附属図書館内に分室をおく。敷地面積 5,081.22 m² 本館建物面積 3,012.5 m² (内 1,500 m² 程は外務省研修所が使用)
1965年10月	本郷構内新庁舎第1期工事完成により一部移転
1968年 7月	全面移転完了
1982年 3月	総合研究資料館と交換分合し，全館を使用。建物面積6,577 m²
1984年 3月	全面改修工事完成
1999年 8月	西側外壁の五階以上の北半大崩落 幸い人身事故に及ばず
2000年 3月	西側外壁の大崩落に伴う外壁全面修理終わる

当研究所の現在の建物は，1965年に一部建築され，その後，増築・改修を経たものの，老朽化と狭隘化の二つの問題を抱えている。そのうち，雨漏りや内外壁面の劣化とヒビ割れについては，1984年の全面改修工事により，一応解消されたと考えられていた状況で，1999年に西側外壁の大崩落が出来した。その後の外壁の全面修理により，応急処置が取られたとはいえ，建物全体の老朽化については，危機的であることが判明している。

狭隘化についても，問題は解消されてはいない。世界的な水準の漢籍を所蔵する関係で，建物の全スペースの3割以上を書庫や閲覧室として，収集・公開の充実を計っているものの，漢籍を含む中国語文献の飛躍的増加や，アラビア語などの非漢字文献の積極的収集により，すでに限界を超え，分類・配架が不可能になりつつある。また，附属東洋学文献センターを改組・拡充し，1999年より，東洋学研究情報センターが発足したのに伴い，従来から行ってきた情報資料の収集・公開をより一層進展させようとの計画に関しても，現在のスペースでは，完全に

不足する状況となっており，抜本的な増築が望まれる。

2. コンピュータ・ネットワークの進展状況

本研究所は，1996年4月に電脳委員会（2000年4月にネットワーク委員会と改称）を設置し，東文研ネットワーク・システムを構築した。現在，複数のサーバ・マシンを利用して，研究所のほぼ総てのパーソナル・コンピュータをクライアントとして接続している。1996年7月よりホームページを本格的に運用し始め，教官の研究情報，図書・資料情報，事務情報を一括して扱うようになっている。

研究情報としては，『東洋文化研究所所蔵漢籍目録データベース』（試験公開中），『中国現代書目録』，データベース『世界と日本』，『近現代中国文学関係雑誌目次データベース』，『南アジア文献検索データベース』，『Tibetan-Sanskrit 構文対照電子辞書プロジェクト eDic』が公開されている。

事務情報としては，教官系と事務官系とが一体となり，各種事務情報のオンライン化が実現されている。

本研究所は，東洋学研究情報センターを中心として，アジア関係の研究・資料情報の収集と蓄積，分析と加工，および研究情報のネットワーク化を重視し，各種の改革を進めてきているが，このネットワーク事業はその中心をなすものである。

東文研ホームページの URL は http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp である。

VI　図書・資料

東洋学研究情報センターの研究活動を支える，文献資料，非文字資料の東洋文化研究所における蓄積状況は，以下の通りである。

1. 図　書

本研究所は，アジア諸地域に関する図書資料を約57万冊，雑誌を約5,586種所蔵している。とくに漢籍は今日では収集不可能な貴重なものが多く，日本では有数のコレクションである。その他に，中国語，朝鮮語，アラビア語，トルコ語，ペルシャ語，インドネシア語，サンスクリット語などの図書・雑誌も鋭意収集に努めている。

本研究所の図書・雑誌数は2000年3月31日現在，次のとおりである。

和・中・朝文図書	434,804冊	
洋文図書	136,458冊	計571,262冊
和文雑誌	1,753種	
朝文雑誌	313種	
中文雑誌	2,388種	
洋文雑誌	1,132種	計5,586種

この他，マイクロフィルム約5,540巻，マイクロフィッシュ約117,570枚を所蔵する。

主要所蔵図書

［大木文庫］ 本研究所創設時に，大木幹一氏より中国法制関係書総数3,168部，45,452冊の寄贈を受けた。公牘類の数百部は本文庫の柱梁をなし，法律関係の貴重書をはじめ，明清以後の時期の研究には不可欠の蒐集資料である。1959年に『東京大学東洋文化研究所大木文庫分類目録』が編纂され，刊行された。

［帝国学士院東亜諸民族調査室旧蔵書］ 1944年帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない，その蔵書の和漢洋書・雑誌・資料等2,000冊が移管された。この

なかには西欧におけるアジア諸民族研究の主要な文献が集められている。

［東方文化学院旧図書］1929年に，東方文化に関する研究機関として，外務省所管の東方文化学院東京研究所が創設されたが，1948年に廃された。その旧蔵書和漢洋あわせて103,587冊が，1967年3月に本研究所に移管された。漢籍の中核は，1929年に中国浙江省の徐則恂氏より一括購入した東海蔵書楼蔵書である。

［松本忠雄氏旧蔵書］1949年度科学研究費により松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書，雑誌など約3,000冊を購入した。とくに近代中国研究資料として重要なものがある。

［長澤規矩也氏旧蔵書］1951・53両年度科学研究費により，長澤規矩也氏旧蔵の約3,000冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類である。1961年1月，本研究所創立20年にあたり，同氏から約150冊の補充を得るとともに，『雙紅堂文庫分類目録』を刊行した。

［清野謙次氏旧蔵書］1952・53両年度科学研究費により，清野謙次氏旧蔵洋書750冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする。1978年3月に『東京大学東洋文化研究所清野文庫分類目録』を刊行した。

［矢吹慶輝氏旧蔵書］1952年度科学研究費により，矢吹慶輝氏旧蔵洋書約360冊を購入した。英仏独のマニ教の文献を中心とし，仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

［下中文庫］下中弥三郎氏より，1953年1月から1957年6月までの，戦後出版の中国書4,500冊，中国雑誌10種および戦後出版の東洋関係洋書130冊の寄贈を受けた。とくに中国書は，当時入手できた書の主要なものをほとんど網羅している。

［東京銀行調査部旧蔵資料］1959・60両年度にわたり，東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和漢書・資料類約18,000冊の寄贈を受けた。

［仁井田陞氏旧蔵書］本研究所名誉教授仁井田陞氏の逝去（1966年6月）後，所蔵の中国書5,000冊，洋書120冊，和書2,200冊，清代公私文書類900余点，50基の碑文の拓本を受け入れた。大木文庫とともに旧中国の社会研究に重要なものである。1999年3月に『東洋学文献センター叢刊　別輯24　東京大学東洋文化研究所仁井田文庫漢籍目録　附和洋書』を刊行した。また清代公私文書類も「東京大學東洋文化研究所　仁井田陞博士蒐集中國文書目録（稿）」として整理した。

［我妻栄氏旧蔵資料］我妻栄氏の逝去（1973年10月）後，所蔵の和洋法学文献および各種資料が東京大学に寄贈された際，本研究所はとくにアジア法制関係文献資料総数647部932冊の寄贈を受けた。1982年3月に『我妻栄先生旧蔵アジア法制関係文献資料目録』を刊行した。

［倉石武四郎氏旧蔵書］1975年度に本学名誉教授倉石武四郎氏の漢籍を主とする

蔵書を収蔵することとなり，1981年度までにその重要な部分，漢籍約4,300点などを購入した。

［**江上波夫氏旧蔵書**］1981・82・84各年度にわたり，本研究所名誉教授江上波夫氏の蔵書のうち，歴史学，民族学，考古学を中心とした洋書の一部約2,550点を購入した。

［**The Daiber Collection I**］1986・87両年度にわたり，東洋学文献センターと協力し，ハンス・ダイバー氏の蒐集した計367点の写本を購入した。イスラームの宗教，思想，歴史に関する重要な資料である。1988年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber* を刊行した。

［**文淵閣本四庫全書影印本**］1988年度に文淵閣本四庫全書影印本（索引つき）全1,501冊を購入した。清代以前の中国の古典文献を網羅した最も基本的な叢書で，中国研究上不可欠の重要性をもっている。

［**オランダ植民地省公文書索引およびジャワ官報**］1989年度に，マイクロフィッシュ化された資料一式を購入した。前者はオランダ国立公文書館所蔵の旧植民地省文書（1980年～1921年）の索引書数百巻分を網羅し，後者はインドネシアのオランダ植民地政府が1928年～1939年に公布した官報の集成である。

［**乾隆版大蔵経**］1990年度に全724函（毎函10冊），大清三蔵聖教目録一函（5冊）を購入した。中国最後の木版大蔵経で，1657部の仏教典籍が収録されている。漢文の大蔵経で経版木が保存されているものは，高麗蔵とこの乾隆版のみで，きわめて貴重な資料である。

［**Ouseley Collection**］イギリスの外交官で東洋学者のG. Ouseley卿（1770－1844）の旧蔵書の一部。17世紀から19世紀にかけてのヨーロッパ人のインド，中近東への旅行記とペルシャ文学作品を主とした60点，全106冊からなる。Ouseley自身の書き込みが随所に見られる点など，資料的価値が高い。

［**南アジア伝導教団資料集成**］南アジア各地で伝導活動を行ったキリスト教団の，18世紀末から20世紀までの年報，諸会議の議事録，往復文書，報告書等を含んだマイクロフィッシュ資料である。

［**Indonesian Monographs, 1945—1973**］オランダの王立・言語・地理・民族学研究所が蒐集した，独立後インドネシアの社会科学関係出版物3,258点をマイクロフィッシュにまとめたもの。内容はきわめて多彩で，インドネシア現代史の研究に不可欠の資料集である。

［**故今堀誠二氏旧蔵書・資料**］広島大学名誉教授今堀誠二氏の逝去（1992年10月）後，所蔵の漢籍300点，中国書2,000冊，文書資料500点を購入した。近現

代中国の社会史資料，華僑史資料など多くの原資料を含む。（1994年度一般設備費）

［**The Daiber Collection** II］本研究所所蔵の「Daiber Collection I」を補完する，18世紀を中心とする12世紀から20世紀初頭に至るアラビア語の写本120点の集成で，西アジア研究・イスラム研究に不可欠の一次資料である。1996年に *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the Daiber Collection II, Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, by Hans Daiber* を刊行した。（1994年度国立学校特別経費）

［**東アジア宗族社会史関係資料**］東アジア全域にわたる宗族社会史の比較研究に重要な資料集。朝鮮族譜集成494冊，中国華南宗族社会史資料，南洋華僑・華人関係資料2,263冊からなる。族譜，社会，華人史の基本資料として貴重な資料である。（1995年度一般設備費）

［**中国西北文献叢書**］陝西，甘粛，寧夏，青海，新疆などの中国西北地方に関する，歴史，地理，民俗，文学そのほかの諸分野の基本文献を網羅した叢書。（1995年度一般設備費）

［**オスマン語・トルコ語年鑑定期刊行物コレクション**］トルコにおいてオスマン語および現代トルコ語で刊行された年鑑類，定期刊行物。19世紀初頭オスマン帝国時代の国家年鑑や，西アジア各地方およびバルカンに関する公的な年鑑など，政治，社会，経済から文化にいたる広汎な分野を網羅し，近現代の西アジア研究者にとって類例の少ない貴重な資料群である。（1996年度一般設備費）

［**西アジア関連写本集成**］ミンガナ・コレクション，ロンドン大学東洋アフリカ研究所およびユダヤ国立大学所蔵のアラビア語を中心としたマイクロフィッシュによる写本集成。コーラン学から，法学，文学，自然科学，歴史学，宗教諸学を含むイスラームを中心とした西アジアの思想・文化・歴史の研究に不可欠の資料である。（1996年度一般設備費）

［**中国第一歴史档案館所蔵清代档案資料**］1997年度に標記档案資料のマイクロフィルムを購入した。内容は「宮中硃批奏摺財政類」「軍機処録副奏摺全国水利雨水自然災害資料」「内閣京察冊」「宮中履歴片」「戸部一度支部棒銀米冊」「琿春副都統衛門档案」「刑法部胎谷案」「吏部造送封贈姓氏冊」「清代琉球档案史料」である。これらは総数一千万件におよぶ中国第一歴史档案館所蔵の清朝公文書の一部を成すものであり，清代中国の政治・制度・経済・社会の分析において極めて重要な第一次資料である。（1997年度一般設備費）

［**前野直彬氏旧蔵書**］本学名誉教授前野直彬氏の逝去（1998年1月）後，小説類に特色を持つ所蔵の漢籍約500点4400冊を購入し，「夕嵐堂文庫」と名付けた。

中に貴重な版本を含んでいる。(1998年度リーダーシップ支援経費)

以上の各コレクションのほか，1958年度から3か年にわたって，文部省科学研究費による総合研究「アジア地域の社会・経済構造」の一環として，資料（主として洋書）1,800 冊を購入し，また1961年度から1965年度まで機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」において，継続して資料の蒐集に努め，総数4,771 冊に達した。

2. 資　料

本研究所の所蔵する諸種の資料のうち，重要なものを以下に掲げる。

[殷代甲骨] 本研究所所蔵甲骨は，次の三部分からなる。第一は，故河井仙郎氏旧蔵の1,708片で，1979年に現蔵者井上富美子氏より寄贈された。第二は故田中慶太郎氏旧蔵の393片で，1979年に購入した。第三は旧蔵者三浦清吾氏より寄贈された2片である。合計2,103片に達し，京都大学人文科学研究所に次ぐ，わが国有数の蒐集である。これは，整理・綴合の上，松丸道雄『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字　図版篇』(東洋文化研究所報告1983年）として刊行された。

[中国歴史古銭・銭范] 旧東方文化学院の蒐集品で，殷代の貝貨，戦国時代の布銭・刀銭・郢爰からはじまり，歴代の代表的貨幣を収蔵する。約1,250点の古銭と，10点の銭の范模を含む。(整理中)

[中国考古資料] 上記の甲骨，古銭以外に，瓦当約110点，鏡，戈，戟，鏃などの青銅器，玉器，土器，磚，磚製買地券，壁面片，俑，仏像，衣服，室内装飾品，土俗品がある。大部分は旧東方文化学院が購入し，本研究所に移管されたものである。

[中国絵画資料（原版・焼付写真・カラースライド等)] 米国，カナダ，欧州，アジアの美術館，個人蒐集家が所蔵する中国絵画，および日本現存の中国絵画に関するものが主体で，その他に米国ミシガン大学アーカイヴより購入した中国絵画の焼付写真，東京国立文化財研究所原版からの焼付写真等があり，現在約20万点にのぼる。「東洋学文献センター叢刊」として10冊の目録が1977～83年，1992年～98年の両度にわたって刊行され，図録は『中国絵画総合図録』(全5巻）として東京大学出版会より1982年～83年，1998年～2000年の両度にわたって刊行された。

[中国清代・民国期の文書資料] 17世紀から20世紀におよぶ，北京をはじめ嘉興，武進，蘇州，通州，宝応，鳳山などの土地文書を中心とし，その他公私文書

類約二千数百点がある。仁井田陞名誉教授旧蔵遺贈分や旧東亜研究所収集文書等を含む。目録と内容の一部は，1983年～86年に『東洋文化研究所蔵中国土地文書目録・解説（上）（下）』（東洋学文献センター叢刊）として刊行された。（整理中）

［内蒙古出土学術資料］ 江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・採集した資料約1万点が，1983年に寄贈された。主として土器片・陶器片である。資料の一部は江上氏のいくつかの論文に掲載されているが，圧倒的多数は未発表のものである。

［インド・イスラム史跡調査関係資料］ デリーおよびインド各地に現存するサルタナット時代のムスリム遺跡に関する資料で，写真，実測図などが主なものである。1959年～62年度に「東京大学インド史跡調査団」が実施した現地調査の成果の一部である。『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』第1巻（1967），第2巻（1969），第3巻（1970）が刊行された。

［西アジア考古資料］ 古代イラン文明の研究を目的として，1956年以来「東京大学イラン・イラク遺跡調査団」が両国における遺跡14か所を発掘・調査した結果，収集したもの。その数は数万点に達し，大部分は発掘品で，考古学上第一級資料である。1958年から1984年にかけて『イラク・イラン遺跡調査団報告』20冊が刊行されている。

3. 図書室の利用状況

これらの図書資料は広く内外の研究者に利用されている。1998年度と99年度の図書室の利用状況は次の通りである。

閲覧者数　＊学内は所内を除く
＊（　）内は外国人内数

区分	学内	学外	計
1998年度	2,804 (928)	3,145 (481)	5,949 (1,409)
1999年度	2,648 (804)	2,969 (450)	5,617 (1,254)

利用冊数

	図書	雑誌	計
1998年度	27,749	8,545	36,294
1999年度	34,822	10,423	45,245

Ⅶ　研究・教育活動

A　部門研究

汎アジア部門

原　洋之介　　池本　幸生　　猪口　　孝　　田中　明彦
原田　至郎　　松井　　健　　菅　　豊（99年10月から）　　関本　照夫
名和　克郎（00年4月から）　　岡本　サエ

汎アジア部門はアジアという対象を，経済学・政治学・人文地理学・文化人類学・比較思想という社会科学・人文科学の広い範囲にわたり，個別専門分野ならびに学際的な領域の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。同時にこの部門ではアジアのアジア研究者とのネットワーキングにも力を注ぎ，アジア研究の地域的ハブとしての機能を担おうとしている。日本も重要な研究対象としている。

経済・統計研究分野は，アジア諸国経済発展の実証的な比較研究を通して，アジア諸国経済発展のアジア域内および世界における国際的位置づけを明らかにするとともに，欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。国際政治分野では，アジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的に行っている。人文地理学研究分野は，アジア諸地域におけるフィールドワークに基づいて，それぞれに異なる自然環境のなかでの人びとの生活の全体像を描くことを試み，その記述にかかわる理論研究を推進することを通してアジア地域の自然と文化の統合的全体を展望することを目標とする。文化人類学研究分野は，アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし，ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの方法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて，下からあるいは周縁から，よりマクロな社会の全体像を見透かそうとしている。比較思想研究分野は，東アジアの思想交流の中にみられる，漢字文化圏の諸民族の思惟的特徴を研究する。

アジア諸地域における社会・文化の変容過程

アジア諸社会の固有文化とその変容

関本　照夫　　インドネシア社会の統合過程

名和　克郎　　南アジアの集団関係とその変容

アジア諸国経済発展の比較研究

原　洋之介　　アジア諸国の工業化と国際貿易

池本　幸生　　アジアにおける所得分配

アジアにおける政治変動と国際関係

猪口　　孝　　太平洋アジアにおける民主化と国際政治

田中　明彦　　東アジアをめぐる主要国間の国際政治

原田　至郎　　アジアにおける国際紛争

アジアにおける環境と生活文化

松井　　健　　西南アジアの生活文化

菅　　豊　　東アジアの生活文化

アジアにおける思想・文化の比較研究

岡本　サエ　　東アジアの比較思想

東アジア部門（第一）

平勢　隆郎　　甘　　懐真　　吉開　将人（00年3月まで）　　黒田　明伸

濱下　武志　　高見澤　磨　　陶安あんど（99年4月から）

東アジア第一部門は，中国，朝鮮，日本，ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ，社会科学，歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を把握することを目標とする。この研究では，とくに東アジア第二部門と協力して，学際的な地域研究による生きた全体像をめざすことは言うまでもない。研究分野としては，経済・社会，政治過程，歴史，考古を包含し，「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として，共同研究を継続している。この部門では，「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」（主任濱下），「朝鮮伝統社会の構造とその変容」（主任宮嶌），「出土文献史料とその歴史的背景」（主任平勢）等の研究班を組織し，本学内外の協力を得，継続して研究をすすめ

ている。

東アジアにおける国家権力と社会経済構造

平勢　隆郎　　中国古代帝国の形成
甘　　懐真　　中国古代の礼と社会
吉開　将人　　中国古代国家と手工業
黒田　明伸　　中国近世・近代の経済と制度
濱下　武志　　中国近代の経済発展
高見澤　磨　　現代中国の法律と社会
陶安あんど　　帝制期中国の法律と社会

東アジア部門（第二）

丘山　　新　　蜂屋　邦夫（99年3月まで）　橋本　秀美（00年4月から）　尾崎　文昭
厳　　鋒（00年3月まで）　小川　裕充　　張　　欣（00年4月から）

東アジア第二部門は，中国を中心とする東アジア地域の思想，宗教，文学，美術を研究対象とする部門である。部門研究としては「庶民文化の形成と展開」を課題としている。

一般に中国では，権力エリートと文化エリートとは分離せずに癒着しており，したがって権力エリートは文化を独占して，庶民は非文化的階層とみなされてきた。しかし，庶民は文化獲得の努力をくり返して行い，権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは権力エリートからは非正統的な文化とみなされ，強く意識されなかったにせよ反権力的指向をもっていた。「庶民文化」は六朝から唐末までに形成され，宋元以後にめざましく発展し，各地方に広がっていたと考えられる。

この課題に対して，各研究分野で独自の検討をするとともに，共同してその解明をめざしている。

東アジアにおける庶民文化の形成と展開

丘山　新	仏教経典の民衆化
蜂屋　邦夫	庶民における三教思想の受容
橋本　秀美	職業としての経学
尾崎　文昭	近現代中国における小説の認識
厳　　鋒	1980年代文学の大衆性
小川　裕充	明清の職業画家
張　　欣	東アジア世界の華人文学

南アジア部門

加納　啓良　　高橋　昭雄　　柳澤　　悠　　井坂　理穂（99年3月まで）
上村　勝彦　　永ノ尾信悟　　戸田　裕久（99年3月まで）

南アジア部門は，東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人々が複雑な社会を形成したうえ，欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て，戦後あいついで独立した諸国からなる地域であるので，今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため，本部門は政治・経済・社会・文化などにわたって過去現在の両者を総合的に研究している。

本部門では，とくに「環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯」を課題として研究を進めてきた。このため，年に数回，部門の構成員が参加して，この課題のもとに部門研究会を開催している。さらにまた，深く分析，検討をするために，所外の研究者の協力を得て研究班を組織し，それぞれ新しい角度から問題を提起し，それについて実証的かつ理論的に検討を行っている。

環ベンガル湾地域における文化・文明の交錯

永ノ尾信悟	古代インド社会と祭式
上村　勝彦	古代インドの文学と社会
柳澤　　悠	近現代インドの経済構造
井坂　理穂	植民地期のインドの政治と社会
加納　啓良	東南アジアの植民地支配と社会経済構造
高橋　昭雄	市場経済体制移行下のミャンマー農村経済
戸田　裕久	中世インドの哲学と宗教

西アジア部門

鈴木　　董	長澤　榮治	羽田　　正	桝屋　友子（99年4月から）
後藤　　明	鎌田　　繁	森本　一夫	菊地　達也（00年3月まで）

西アジア部門は，アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域，いわゆる中近東を研究対象とし，あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この広大な地域の政治，経済，文化，社会を，学際的研究によって総合的に理解し，その特質を解明することが本部門の目的である。そのために各自が独自の立場から個人研究を行うとともに，「西アジア文化の歴史的形成と現代的課題」を共通の研究題目とする共同研究が実施されている。

西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

鈴木　　董	オスマン帝国の政治社会史的研究
長澤　榮治	近現代アラブの社会経済史研究
羽田　　正	イラン・イスラム社会の特徴
桝屋　友子	イスラーム地域における美術と社会
後藤　　明	初期イスラム社会史
鎌田　　繁	イスラム神秘思想の構造と展開
森本　一夫	イスラム世界における聖性の研究
菊地　達也	ファーティマ朝思想

東洋学研究情報センター

宮嶌　博史　　鈴木　隆泰　　中里　成章　　板倉　聖哲（99年4月から）

深見奈緒子（99年10月から）

アジア資料学の構築

宮嶌　博史　　東アジア文献資料の研究

鈴木　隆泰　　アジア哲学宗教文献資料の研究

中里　成章　　南アジア非文字資料の研究

板倉　聖哲　　東アジア造形資料の研究

深見奈緒子　　イスラーム建築写真資料の研究

B　長期国際共同研究

中国社会の変動が及ぼすアジア諸国への影響の研究

香港大学アジア研究センターと共同で，5年間にわたり香港研究プロジェクトならびにアジア研究ネットワーク形成プロジェクトとしてすすめられている。

（○ は研究担当者，＊ は学外の研究協力者）

委員長　濱下　武志

宮嶌　博史　　平勢　隆郎　　高見澤　磨　＊吉開　将人

＊青木　　敦　＊黨　　武彦　　黒田　明伸　＊弘末　雅士

＊金　鳳　珍　＊C. A. Daniels　＊菅谷　成子　＊飯島　　渉

○谷垣真理子　　蜂屋　邦夫（99年3月まで）　　尾崎　文昭　　小川　裕充

丘山　　新　＊笠井　直美　　加納　啓良　　高橋　昭雄

＊重松　伸司　　鈴木　　董　　岡本　サエ　　原　洋之介

田中　明彦　　原田　至郎　＊廖　赤　陽　　板倉　聖哲（99年4月から）

陶安あんど（99年4月から）　　張　　欣（00年4月から）

激動するイスラーム圏の政治・社会構造の変容過程の研究

国立民族学博物館地域研究センターと連携し同センターとの共同の下にプロジェクトを推行している。

委員長　鈴木　董

平勢　隆郎　＊黨　武彦　丘山　新　上村　勝彦
柳澤　悠　加納　啓良　永ノ尾信悟　後藤　明
鎌田　繁　羽田　正　桝屋　友子（99年4月から）　長澤　榮治
森本　一夫　＊山中由里子　＊小泉　龍人　＊清水　和宏
＊松原　正毅　＊小杉　泰　＊木村　喜博　＊黒田　卓
○柳橋　博之　＊臼杵　陽　＊M. Sadria　＊中田　考
＊菊地　達也　原　洋之介　関本　照夫　松井　健

環ベンガル湾地域における社会・経済・文化の交錯と変動

ベンガル湾を取り巻く南アジアから東南アジアにかけての一帯を，独自の連関を持つ地域としてとらえ，地域内の社会・経済・文化の交錯と変動を考察する。

委員長　加納　啓良

高橋　昭雄　柳澤　悠　中里　成章　○井坂　理穂
上村　勝彦　永ノ尾信悟　＊川島　耕司　＊斎藤　照子
＊青山　亨　原　洋之介　猪口　孝　田中　明彦
原田　至郎　松井　健　関本　照夫　岡本　サエ
池本　幸生　＊安藤　充（00年4月から）

C　班研究

各専門分野の研究を推進し所外の研究者との交流を深めるため，所員を主任とする班研究会が特定のテーマごとに数多く設置されている。所外の参加者には東京大学の他部局に属する「研究担当者」と，その他の教育・研究機関に属する「研究協力者」の双方が含まれる。1999，2000両年度における班研究会の組織状

況は，次のとおりである。（○は研究担当者，※は研究協力者。途中で所属先の変わった者については，変更後の所属先にもとづいて分類。）

アジアにおける地域工芸産業の研究　主任　関本

アジア各地における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例を，文化人類学，経済学，美術工芸の視点をあわせて研究し，その現状，歴史的背景，今後の発展の可能性を知ろうとするものである。

関本　照夫　　松井　　健　　髙橋　昭雄　　池本　幸生
名和　克郎（00年4月から）　○山下　晋司　※小笠原小枝　※塩田　光喜
※伊藤ふさ美　※林　　行夫　※中谷　文美　※水野　広祐

「自然」観の通文化的研究　主任　松井（1998年度で終了）

自然は人間生活の外部環境として，生業の対象となったり，文化表象に用いられるばかりではなく，ときとして，人間の想像力や表現芸術の創造性を励起するものとなり，文化のまっただなかに姿をあらわす。自然をめぐる文化的プラクシスの多様性を通して，人類学的課題としての「自然」の位置を探ることを目指す。成果は，『自然観の人類学』（榕樹書林）として刊行された。

松井　　健　※松田　　清　　菅　　豊　※小長谷有紀
※竹川　大介　※須藤　健一　　永ノ尾信悟　※松原　正毅
※篠原　　徹　※太田　　至　※栗田　和明　※掛谷　　誠
※武田　　淳　※菅原　和孝　※宮岡　伯人　※山本　紀夫
※西谷　　大　※窪田　幸子　※高倉　浩樹

自然資源の領有と利用の比較社会誌　主任　松井（1999年度から）

人間がその固有の社会活動を通して，自然の領有と専用をどのように確立していったかを歴史的に追うことは，有名なカール・マルクスの試みを含めて，何度も企図された重要な人類学的探求である。本研究は，民族誌的比較の手法を用いて，この問題に迫ろうとするものである。

松井　　健　　永ノ尾信悟　　菅　　豊（99年度から）　※小長谷有紀

※須藤　健一　※篠原　　徹　※武田　　淳　※菅原　和孝
※西谷　　大　※窪田　幸子　※高倉　浩樹　※河合　香吏（99年度から）
※野林　厚志（99年度から）

構造調整下のアジア経済の展望　主任　原

アジア地域全体で展開されている経済の構造調整政策ならびに市場経済への移行について，その成果・問題点を比較の視点から解明している。

原　洋之介　　池本　幸生　※杉本　義行　※今岡日出紀
○藤田　夏樹　※新谷　正彦　○永田　　信　※福井　清一
※石田　正昭　※本台　　進　○田嶋　俊雄

アジア太平洋諸国における日本外交　主任　猪口

アジア太平洋諸国は大きな変動を経験している。本研究計画は日本のアジア外交の実証研究を目指すものである。地球政治の枠組み，東アジア地域，東南アジア地域，日米関係などを分担しつつも，全体像を浮かび上がらせるような研究運営を図っていきたい。

猪口　　孝　　田中　明彦　　原田　至郎　○山本　吉宣
○山影　　進　○石井　　明　○古城　佳子

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治　主任　田中

東アジアの国際政治の分析として，各国の対外政策決定過程を比較分析するための作業を行うとともに，冷戦後の北東アジアをめぐる日米中関係の展開，朝鮮半島情勢の分析を行った。

田中　明彦　○山影　　進　※浅野　　亮　○古田　元夫
※伊豆見　元　※瀬島　　誠　○谷垣真理子　※今村　弘子
原田　至郎

世界システムの諸類型　主任　田中

世界史上に存在したさまざまな世界システムの特徴を比較分析するための作業を続けている。近代世界システムとヨーロッパ中世の比較，古代中国，イスラム世界，アジア海洋世界などの比較を行った。

田中　明彦　　平勢　隆郎　　濱下　武志　　鈴木　　董
上村　勝彦　　原田　至郎

比較文化研究の方法　主任　岡本（1998年度で終了）

アジア比較文化基本文献（原典）の解題集をまとめることを目的に，専攻の異なる研究者が協力して取り組んでいる。文献の範囲と分類方針を定め，執筆する予定。

岡本　サエ　※加藤　祐三　　関本　照夫　※田辺　勝美
※小宮　　彰　　宮嶌　博史　※西原　大輔　○佐藤　慎一
○川原　秀城　※吉田　　忠　　原　洋之介　※清水　　学
鈴木　　董　　鎌田　　繁

アジア比較文化研究の基礎資料　主任　岡本（1999年度から）

比較文化はその成立史から，かつては西欧資料について論じられることが多かったが，第2次大戦以降は特にアジア文化の多様性が強調されるようになった。しかしアジア比較文化の基礎資料が一堂に集められた解題集は，皆無に近い。そこでアジア比較文化の古典を数十点取り上げ，解題集を作ることに集中している。

岡本　サエ　※加藤　祐三　※田辺　勝美　※小宮　　彰
※西原　大輔　○佐藤　慎一　○川原　秀城　※吉田　　忠
※清水　　学　　鈴木　　董

中国出土文字史料とその歴史的背景　主任　平勢

本研究は，中国古代出土文献史料の重要性が日益に高まっている現状に鑑み，当該史料の活用をはかり伝存史料との接点を探ることを基礎作業とし，各自のテーマについての討議を進め，問題点を整理する。主として討議の対象としたのは，平勢の進めている戦国紀年整理に関わる問題である。

平勢　隆郎　※竹内　康浩　※原　宗子　※影山　輝国
※鶴間　和幸　※工藤　元男　※谷　豊信　※飯尾　秀幸
※吉開　将人（99年度から）　※熊谷　滋三　※近藤　浩之　※窪添　慶文
甘　懐真（00年度から）

内蒙古出土学術資料の調査研究　主任　後藤

江上波夫名誉教授が戦前に内蒙古で発掘・収集した学術資料を点検し，その学術的価値を確認して，内外の研究者の利用の便に供することを目的としている。

後藤　明　平勢　隆郎　※吉開　将人　※林　俊雄
※高濱　秀　※中見　立夫

道家道教思想の総合的研究　主任　蜂屋（1998年度で終了）

主として，後漢から随唐時代にかけての，道教史および道教思想史について，各方面の専門家に参加してもらって総合的に検討している。

蜂屋　邦夫　※高橋　忠彦　※原田　二郎　※前田　繁樹
○池田　知久　※中嶋　隆蔵　※松岡　栄志　丘山　新
○末木文美士　※菅野　博史　※末岡　実　※吉田　純
※藤本　幸夫

東アジアにおける仏教経典の受容　主任　丘山（1999年度で終了）

中国各分野の研究者の協力を得て，唐五代の禅宗史書である『祖堂集』の会読

を進めている。その成果は訳注および論文の形で順次『紀要』に発表中。

丘山　新　※神塚　淑子　※河野　訓　※小川　隆
※衣川　賢次　※松原　朗　※土屋　昌明　※石井　修道
※石井　清純　※館野　正美　○末木文美士（99年度から）　○下田　正弘（98年度まで）
鈴木　隆泰　※前川　亨

中国禅宗語録の研究　主任　丘山（2000年度から発足）

「東アジアにおける仏教経典の受容」より発展。従来の『祖堂集』の会読・訳注の作業を基礎として，唐代禅宗の思想と歴史を研究中。

丘山　新　橋本　秀美　※神塚　淑子　※小川　隆
※衣川　賢次　※松原　朗　※土屋　昌明　※石井　修道
※石井　清純　○末木文美士　鈴木　隆泰　※前川　亨

1980-90年代中国の思想・文化・学術　主任　尾崎

中国の1980-90年代は，文化全般の大変革期であったが，その構造的変革の様相とその意味をとらえるべく，思想・文学・社会史学・法学などの各分野の研究者によりイデオロギー分析などの方法による研究を進める。

尾崎　文昭　丘山　新　高見澤　磨　張　欣（00年度から）
※上田　望　○大木　康　○大西　克也　※笠井　直美
※厳　鋒　※坂井　洋史　※坂元ひろ子　※砂山　幸雄
○戸倉　英美　※廣瀬　玲子　○村田雄二郎　※茂木　敏夫（99年度から）

中国一九三〇年代の文学　主任　尾崎

1930年代を中心にしつつ，広く中国現代文学の実証的な研究を目的とし，雑誌『現代』の輪読を軸に研究報告会，合宿などを行う。また，世界の同分野の研究者との研究交流も積極的に行う。

尾崎　文昭　※芦田　肇　○伊藤　徳也　※大滝　幸子
○刈間　文俊　※近藤　龍哉　○櫻庭ゆみ子　※佐治　俊彦

※清水賢一郎　※白水　紀子（00年度から）　○代田　智明　※陳　　捷（00年度から）
○藤井　省三　※松岡　俊裕

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究　主任　濱下

東洋文化研究所が所蔵する仁井田陞博士コレクションの土地契約文書の解読研究から出発した本研究班は，その後東洋学文献センター叢刊などにおいて解題・目録を作成した。その他商業文書，日用文書などを継続的に研究する。

濱下　武志　　高見澤　磨　※青木　　敦　※黨　　武彦
○岸本　美緒　※上田　　信　※寺田　浩明　※張　士　陽
※臼井佐知子　※Linda Grove　※久保　　亨　宮嶌　博史
○石川　　洋　※川村　　康　　黒田　明伸　※金田　真滋（99年度から）
※廖　　赤陽（99年度から）

近代アジア社会研究の方法的課題　主任　濱下

班員が研究対象とするアジア諸地域社会をその内的構成において検討すること，またそれらの近代という問題へのかかわり方を様々な角度から討論し，さらに地域間で比較検討を行い，アジア社会研究の方法的課題を明らかにする。

濱下　武志　　宮嶌　博史　　柳澤　　悠　　鈴木　　董
加納　啓良　　原　洋之介　　中里　成章

中国法研究における固有法史研究，近代法史研究及び現代法研究の総合の試み　主任　高見澤（2000年度から）

従来，中国法研究においては，清末までの固有法史研究と1949年以降の現代法研究との対話は十分ではなく，また，蓄積のあるこの両者に比し，近代法史研究が手薄であった。本研究班においては，固有法史研究，近代法史研究及び現代法研究を対話させ，「中国法」研究を行うことの可能性を探る。

高見澤　磨　○ポールチェン　○松原健太郎　　陶安あんど
※中村　正人

現存する中国絵画の包括的再検討　主任　小川

本班は，東アジア美術研究室所蔵中国絵画写真資料を維持・拡大させるため世界の公私の中国絵画コレクションの調査撮影を実行する母胎となっており，1997年度まで第二次の包括的調査をほぼ完了した。現在，その成果を承けて，『中国絵画総合図録　続編』の刊行を終え，画像データベース構築作業を行っている。

小川　裕充　板倉　聖哲　※海老根聡郎（98年度まで）　※嶋田　英誠
※湊　信幸　※宮崎　法子　※藤田　伸也　※救仁郷秀明
※井手誠之輔　※林　秀　薇

朝鮮伝統社会の構造とその変容――方法論的探究　主任　宮嶌

近現代の朝鮮社会の個性的展開を，伝統社会の構造とその変容という視点から把握することを目指している。

宮嶌　博史　○吉田　光男　○小川　晴久　※山内　弘一
※吉野　誠　※趙　景　達　※月脚　達彦　※康　成　銀
※尹　健　次　※並木　真人

東南アジア近現代史像の再検討　主任　加納

欧米植民地支配のもとでの変容，独立後の国民国家形成，インドシナ，ビルマにおける社会主義の実験，ASEAN諸国を中心とする経済発展などを経て東南アジアの社会は大きく変わる一方，1997年からの金融危機はその弱点をも示し始めている。こうした経過を踏まえ，この地域の近現代史像の再構成を試みる。

加納　啓良　※浅見　靖仁　※小泉　順子　○桜井由躬雄
※白石　昌也　○末廣　昭　高橋　昭雄　※土佐　弘之
○中西　徹　○藤原　帰一　○古田　元夫

ミャンマー近現代史における「国」と「民」 主任　髙橋（1999年度から発足）

王朝の崩壊後，植民地，議会制民主主義，社会主義，そして軍政下の市場経済化と遷移してきた体制の中で，ミャンマーの農民，市民，諸民族，知識人らがこれにどのように対応し，またかかわってきたのかを総合的に研究する。

髙橋　昭雄　※根本　　敬　※工藤　年博　※谷　祐可子

植民地期南アジア像の再検討――経済と政治 主任　柳澤

植民地期の南アジアの経済と政治に関する過去20年間の研究の進展は目ざましく，従来の認識を大幅に変更するものとなっている。人口史・飢饉史などの研究も急速に進展してきた。本研究会は，これらの新たな研究動向の展開を整理して，植民地期の政治経済像の再構成を追求する。

柳澤　　悠　○水島　　司　※粟屋　利江　○井坂　理穂
※山本由美子　※竹中　千春　※佐藤　　宏　※脇村　孝平
※杉野　　実（99年度まで）　※大石　高志（00年度から）

南アジアにおける経済発展と国民形成（1930年～1990年） 主任　中里

最近のインド経済自由化への急激な動きは，南アジアの経済と政治がかつてない転換期にたたされていることを示している。本班研究は，独立前の模索の段階を経て，独立後独特のかたちで発展を遂げた南アジアの国民経済と国民国家のシステムにいかなる問題があったのか，今日の視点から検討を加える。

中里　成章　※絵所　秀紀（99年度まで）　※押川　文子　※黒崎　　卓
※近藤　則夫　※藤井　　毅　○藤田　幸一　※脇村　孝平

インド古代叙事詩の研究 主任　上村

ヒンドゥー教を研究する上で最も基本的な資料である二大叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』を中心に，古代インドから近代インドに至るまでのイ

ンドの思想，宗教，文化を通観することを目的とする。そのために，ヴェーダ，仏教，法典，美術建築，宗教儀礼，ヒンディー文学の研究者の協力を得る。

上村　勝彦　永ノ尾信悟　○土田龍太郎　○高橋　孝信
○入山　淳子　※松原　光法　※渡瀬　信之　※金　漢　益
※戸田　裕久　※水野　善文

南アジアとイスラーム　主任　永ノ尾

パキスタンとバングラデシュをふくむ南アジアはイスラーム教徒が最も多い地域である。13世紀以降に本格的に接触をはじめたイスラーム文化は南アジアの文化に多大な影響を与えた。13世紀以降の南アジアにおけるイスラーム文化とヒンドゥー文化の接触，変容の過程をさまざまな視点から分析していく。

永ノ尾信悟　※石井　溥　鎌田　繁　※関根　康正
中里　成章　羽田　正　松井　健　柳澤　悠
※山下　博司　※榊　和良（99年度から）

アジア都市比較の課題と方法　主任　鈴木

アジア諸地域の都市の特質について，アジア専門家とアジア以外の地域の専門家の協力により，解明を加えることをめざし，研究会を持つこととしている。

鈴木　董　※陣内　秀信　松井　健　※妹尾　達彦
○大木　康　※清水　展　羽田　正　※坂本　勉
※林　佳世子　※黒木　英充　○本村　凌二

比較イスラム制度史の研究　主任　鈴木

前近代イスラム世界の諸制度の形成・伝播・発展について，政治制度を中心に比較史的検討を行うことをめざしている。

鈴木　董　※花田　宇秋　○佐藤　次高　※三浦　徹
※私市　正年　※林　佳世子　羽田　正

中東の社会変容と思想運動　主任　長澤

東アラブを中心として，近代以降の中東の社会経済変容と政治社会思想の展開の相互の関係を，各地域の事例研究に依拠して比較考察する。

長澤　榮治　※臼杵　陽　※岡野内　正　※加藤　博
※栗田　禎子　※福田　安志　※松本　弘

イスラム史料の総合的研究　主任　鈴木

イスラム圏の諸史料の史科学的検討をめざし，現在は，オスマン語史料につき，オスマン史以外の専門家も含めて，史料講読会をもち，史科学的検討を進めている。

鈴木　董　※坂本　勉　※八尾師　誠　羽田　正
※林　佳世子　※黒木　英充　※堀井　優（99年度から）　※加藤　博
※私市　正年　※三沢　伸生

都市社会と宗教施設　主任　羽田

イスラム世界の都市においては，モスク，マドラサ，聖廟などの宗教施設が社会的に重要な意味を持っている。本班研究では，イスラム世界内外の都市史や建築史の専門家の共同討議によって，これら宗教施設の社会的機能を解明することを目的としている。

羽田　正　○藤井　恵介　※私市　正年　○小松　久男
※M Sadria　※林　佳世子　※三浦　徹　深見奈緒子
※山中由里子　森本　一夫

欧文ペルシア旅行記の研究　主任　羽田

15世紀以来数多く記されてきた欧文によるペルシャ旅行記に関する情報を集積し，その特徴を文献学的に解明することとともに，その記述を多角的に利用し

て，イラン社会の特徴やヨーロッパ社会とイスラム社会の相違などの問題を明らかにすることを目指す。

羽田　正　＊近藤　信彰　＊山岸　智子　＊山中由里子
＊山口　昭彦　桝屋　友子（99年度から）

ジャーヒリーヤからイスラームへ　主任　後藤

内外の研究者を招いての研究会での発表などを通して，中東地域におけるイスラーム以前からイスラーム後の時代への変化を，政治，経済，社会，思想，文学など多様な側面から検討する。

後藤　明　○郁　勇造　＊花田　宇秋　＊佐々木淑子

イスラーム思想の文献学的研究　主任　鎌田

本研究所にはアラビア語を中心とする写本集成である「ダイバー・コレクション」が所蔵されているが，これら原資料やマイクロフィルムの資料を活用して，イスラームの幅い思想を研究者のさまざまな関心に基づいて研究を進めることを目的としている。その一環として定期的に文献の購読を行っている。

鎌田　繁　後藤　明　＊小林　春夫　○佐藤　次高
○杉田　英明　○竹下　政孝　＊東長　靖　＊中田　考
＊野元　晋　＊藤井　守男　＊菊地　達也

附属東洋学文献センター
アジア研究とコンピュータ　主任　岡本（1998年度で終了）

97年度の「データベース作成とネットワーク」班を発展させ，データベース作成やネットワーク化を中心に，アジア研究におけるコンピュータ利用とその可能性を探る。実務に携わっている研究者が方法論を検討し，『東洋文化』79号に特集を組んだ。

岡本　サエ　○大木　康　＊大塚　秀高　丘山　新
加納　啓良　＊宮　寧　鈴木　隆泰　田中　明彦

羽田　正　原田　至郎　※檜垣　泰彦　※山田　直子

インターネット利用技術　主任　岡本（1999年度から発足）

インターネットにおける中国書データベース，安全な利用環境のためのセキュリテイ関連技術，マルチメディア・コンテンツの利用などのインターネット利用技術に関して，研究発表や情報交換を行う。

岡本　サエ　板倉　聖哲（99年度から）　○大木　康　※大塚　秀高
※梶浦　晋　加納　啓良（00年度から）　※官　寧　鈴木　隆泰
田中　明彦　※二階堂善弘　原田　至郎　※檜垣　泰彦
平勢　隆郎　※安田　聖（00年度から）　※山田　直子

東アジア文献資料学の課題と方法　主任　宮嶌

近年膨大に拡大しつつある東アジアの文献情報を含めて，資料蓄積の新たな方策を探る。

宮嶌　博史　濱下　武志　高見澤　磨　黒田　明伸
平勢　隆郎　丘山　新　尾崎　文昭　鈴木　董
永ノ尾信悟

南アジア文献資料学の課題と方法　主任　永ノ尾

南アジアにはさまざまな言語で伝承されてきたさまざまな文献資料が存在する。それらの文献資料を網羅的に収集し，整理分析し，南アジアの社会，文化の研究に基礎資料として提供できるようにするためには，いかなる方策を講じる必要があるかを，総合的に検討する。

永ノ尾信悟　中里　成章　柳沢　悠　上村　勝彦
加納　啓良　高橋　昭雄　鈴木　董　宮嶌　博史

西アジア文献資料学の課題と方法　主任　鈴木

西アジアには，イスラム時代のみをとっても，アラビア語，ペルシャ語，トルコ語を中心に，様々のタイプの文献資料が存在する。これら文献資料の資料学的検討と，その収集・利用・保存等につき多面的に検討することをめざす。

鈴木　董　長澤　榮治　羽田　正　後藤　明
鎌田　繁　宮嶌　博史　永ノ尾信悟

アジア土地関係資料の比較研究　主任　宮嶌

アジア各地域の土地台帳・地税徴収簿・土地売買文書などのあり方を比較し，社会編成の特質を展望することを目指している。

宮嶌　博史　○岸本　美緒　○杉本　史子　※斎藤　照子
髙橋　昭雄　中里　成章　※三沢　伸生

東アジアの家系記録（宗譜・族譜・家譜）に関する總合的比較研究

主任　宮嶌（2000年度から）

東アジア社会の歴史と現実において重要な意味を有する父系血縁集団の記録である族譜（宗譜・家譜）について，その時期別作成状況，体裁，現存状況などを総合的に比較検討する。

宮嶌　博史　※瀬川　昌久　※上田　信　※嶋　陸奥彦
※中西　裕二　※豊美山和行　森本　一夫

仏教美術に関する資料収集と比較研究　主任　板倉

日本に現存する中国絵画の内，仏教絵画を中心にして宗教画が非常に重要な位置を占めている。これらは中国絵画の主流のみからは理解し得ないものであり，むしろ，日本の中でいかに受容されてきたかという視点と合わせて双方からの検討が必要である。本班研究は，様々な文物を対象として受容・理解における共有

との差異の相を明らかにするための共同作業である。

板倉　聖哲　＊内藤　　榮　＊伊東　哲夫　＊稲本　泰生
＊高橋　範子　＊高橋　照彦　　丘山　　新

D　定例研究会

本研究所では，毎年5〜6回の頻度で，研究所スタッフ全員の参加する定例研究会を開催している。5つの研究部門と3つの長期研究プロジェクトの各々が輪番制により毎年1回，部門構成員のいずれか1名の研究報告をこの研究会で行うのが慣例となっている。また毎年度末には，定年退官する教官の最終研究発表会を催している。過去2年間の開催状況は次のとおりである。

1998年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
6月25日	汎アジア	池本　幸生	東南アジアの地域統合と産業立地
10月15日	環ベンガル湾プロジェクト	加納　啓良	十九世紀初めのジャワ村落と『耕作者』——稠密社会化の初期局面
11月19日	南アジア	戸田　裕久	中世インドシヴァ教の発展
12月10日	西アジアプロジェクト	菊地　達也	イスマーイール派の神話構造

1998年度退官記念最終発表研究会

3月11日　　蜂屋　邦夫　　白居易の道家道教思想

1999年度

開催月日	担当部門	報告者	研究発表論題
6月24日	西アジア	桝屋　友子	ヨーロッパの壁を飾るペルシャ・タイル——19世紀後半ヨーロッパにおけるペルシャ・タイルのコレクション

9月 9日	東洋学研究情報センター	板倉 聖哲	宋代文人サークルの表象——虚構としての「西園雅集」とその絵画化をめぐって
10月14日	東アジア1	陶安あんど	一般名詞としての「律令」——法典編纂史再考
11月 18日	東アジア1	吉開 将人	南中国からみた秦漢帝国の成立と展開——百越・南越・ベトナム
12月11日	西アジア	長澤 榮治	アラブ主義の現在

E 学術研究・調査

1. 特別事業費等による海外現地研究

中里成章（1999. 3. 17～4. 5）：特別事業費

ニューデリーのインド国立公文書館およびワシントンのアメリカ合衆国公文書館において，第2次大戦中のインド戦時経済と印米経済関係に関する史料を調査した。

松井 健（1999. 3. 29～4. 13）：特別事業費

イギリスを訪問し，研究資料の蒐集を行った。

鈴木隆泰（1999. 3. 25～3. 30）：特別事業費

タイを訪問し，仏教遺跡視察・調査を行った。

高橋昭雄（1999.2.7～2.23）：特別事業費

イギリス，フランスを訪問し，資料収集を行った。

長澤榮治（1999. 3. 14～3. 30）：特別事業費

エジプト，オランダを訪問し，資料収集及び調査を行った。

尾崎文昭（2000. 3. 13～3. 30）：特別事業費

中国近代文学関係の資料調査と研究打ち合わせのため，スタンフォード大学・

ハーバート大学・コンロンビア大学を訪問。

鎌田　繁（1998. 10. 26～12.31）：リーダーシップ支援経費
カナダを訪問し，イスラーム思想文献調査を行った。

黒田明伸（1998. 12. 5～12. 19）：リーダーシップ支援経費
中国社会科学院経済研究所所蔵の中国物価史料の調査を行った。

宮嶌博史（1998. 12. 17～12. 29）：リーダーシップ支援経費
韓国における戸籍・量案・族譜資料電算入力化作業の現状調査。東亜大学校・京畿大学校・成均館大学校・ソウル大学校。

丘山　新（1999. 3. 13～3. 31）：リーダーシップ支援経費
イギリス，ドイツを訪問し，「図書館情報化シンポジウムにて漢籍データベースの国際統一規格化に関する意見交換，および敦煌写本の資料収集」を行った。

宮嶌博史（1999. 11. 22～11. 27）：リーダーシップ支援経費
上海図書館との族譜資料の交換交渉および韓国族譜資料の調査，中国上海図書館・韓国国立中央図書館。

尾崎文昭（1999.11. 22～11. 25）：リーダーシップ支援経費
中国上海図書館で，資料交換の打ち合わせを行った。

丘山　新（1999.12. 19～12. 29）：リーダーシップ支援経費
台湾，中華人民共和国を訪問し，「台湾地域漢籍目録統合データベースとの連携のための協議，および同問題に関する中国との協議」を行った。

森本一夫（2000. 3. 4～3. 25）：リーダーシップ支援経費
米国を訪問し，文献資料調査及び研究打ち合わせを行った。

鈴木隆泰（2000. 3. 18～3. 27）：リーダーシップ支援経費
イギリスを訪問し，サンスクリット研究を行った。

丘山　新（1998. 6. 19～6. 24）：海外学術交流拠点設置・運営経費

シンガポール，台湾を訪問し，漢籍データベース化に関する意見交換を行った。

厳　　鋒（1999. 2. 19～2. 26），尾崎文昭（1999. 2. 19～2. 24），関本照夫（1999. 2. 21～2. 27），高橋昭雄（1999. 3. 6～11. 3. 11），風間正之（1999.3. 6～11. 3. 11）：海外学術交流拠点設置・運営経費

本研究所のシンガポール海外拠点を訪問し，学術交流協定による研究調査を行った。

2. リーダーシップ支援経費

蜂屋邦夫「夕嵐堂文庫」購入

本学名誉教授前野直彬氏の逝去（1998年1月）後，小説類に特色を持つ所蔵の漢籍約500点4400冊を購入し，「夕嵐堂文庫」と名付けた。中に貴重な版本を含んでいる。

1998年度598. 5万円

板倉聖哲

機材としては入力用にニコンD1（デジタル・カメラ），作業用に端末など，出力用に富士ピクトロスタッドなどを購入，それらをランで結びつけ，既に稼働させている。素材として1000画像以上を選択した上でデジタル化し，画像データベースの基礎となる部分を作成した。これらの成果の一部は東洋学研究情報センターのホームページ上でアジア・デジタル展示館として公開中である。

1999年度957. 7万円

宮嶌博史「朝鮮・韓国の族譜」

19-20世紀にかけて作成された全310種，1900冊余りの族譜で，既に本研究所で所蔵されているものと合わせて，500種余りから成る我が国最大の朝鮮族譜のコレクションとなった。

1999年度458. 8万円

3. 文部省科学研究費による研究・調査

猪口　孝「民主主義の機能不全の理論的実証的研究―アジア・ヨーロッパにおける価値・規範民主主義の世論調査に基づく」：特別推進研究

民主主義は20世紀第4半期にその数を急速に増加させたが，どのように機能しているかについてアジアとヨーロッパの18カ国で世論調査を行う。政治についての基本的感じ方，考え方を政治文化と呼ぶがそのなかでもidentity, trust, competitionに焦点をあて民主主義への期待や不安を草の根レベルで捉えたい。

1999年度1,800万円

中里成章「南アジアの経済発展における計画と市場」：特定領域研究（A）（1）

本プロジェクトは，特定領域研究117「南アジア世界の構造変動とネットワーク――多元的共生社会のモデルを求めて」の中の第1班のもので，歴史的観点および他のアジア諸国との比較の観点を導入しつつ，自由化以後の南アジア経済の変動を分析することを目的とする。

1998年度870万円　1999年度960万円

柳沢　悠「南アジアにおける環境変動と開発」：特定領域研究（A）（1）

特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」の第3班。

南アジアにおける環境や生態の変化を，経済開発との関連で考察する。とくに，農業開発や畜産開発と環境変動との相互関係や人口や衛生と環境を，村落社会の構造的変動と関連させながら考察する。

1998年度870万円　1999年度960万円

永ノ尾信悟「ヒンドゥー儀礼の伝承と現状」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」の公募研究。

南アジアのイスラーム関係文献に言及されるヒンドゥー儀礼の記述を分析し，ヒンドゥー儀礼の伝承の一つのあり方を考察。

1998年度120万円　1999年度100万円

黒田明伸「貨幣・金融を中心とする近代世界システムにおけるインドと中国の比較」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」の計画研究。

大英図書館，オックスフォード・インド研究所，ケンブリッジ大学図書館，国立公文書館，ロンドン政治経済学大学院図書館にてインドの貨幣と金融に関する資料を収集した（1999/6/29-7/29）。

1999年度120万円

鎌田　繁「イスラームにおける伝承知と理性知」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「古典学の再構築」の計画研究。

シーア派神秘思想家とオスマン朝知識人とがもっていた宗教観，世界観，人間観をそれぞれの残した文献資料に基づいて解明することを目的とし，彼らの著作を翻訳し，その著作に歴史的，思想史的な注解を施すことを行っている。

1999年度270万円

羽田　正「『シャーナーメ』の伝承とイラン人意識の形成」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「古典学の再構築」の計画研究。

特定領域研究「古典学の再構築」の計画研究を構成する一つの計画研究として「シャーナーメの伝承とイラン人意識」という題目の研究を行った。

1999年度260万円

丘山　新「仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容」：特定領域研究（A）（2）

特定領域研究「古典学の再構築」の計画研究。

仏教を資料に，主要概念がどのように翻訳され，いかに受容されていったかを探る。

1999年度270万円

田中明彦「アジア・太平洋諸国の対外政策形成・実行過程の研究」：基盤研究(A)（1）

アジア・太平洋諸国の対外政策の決定・実行過程を分析するため専門家や実務家からのヒアリングを行うとともに，各国別の政策形成・実行過程の特徴の抽出につとめ，比較分析の枠組みを検討した。

1998年度560万円　1999年度580万円

関本照夫「経済発展下の文化創造－東南アジア地域工芸産業の現代的発展の総合的研究」：基盤研究（A）（2）

東南アジア5ヵ国（インドネシア，ビルマ，タイ，ラオス，ベトナム）における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例について，現状，歴史的背景，今後の発展の可能性を，文化人類学，経済学，美術工芸の視点を合わせて現地調査。

1999年度140万円

蜂屋邦夫「道教内丹学の形成と展開についての語彙および図象論的研究」：基盤研究(B)(2)

『悟真篇』など時代性のはっきりしている道家内丹資料から語彙を抽出し，それを基準にして多くの文献間の関係を解明し，内丹の歴史とその特質を明らかにする。それに図象研究を組み合わせ，内丹術の形成と伝承をあきらかにする。

1998年度60万円

加納啓良「風土と物産から見た環ベンガル湾世界の社会経済史的研究」：基盤研究(B)(2)

南アジアから東南アジアにまたがる「環ベンガル湾世界」の近・現代社会経済史について，「風土と物産」「土地制度と農業変化」「交通・商業・金融のリンケージ」などの主題を中心にデータ収集と比較研究を行う。

1998年度190万円　1999年度150万円

鎌田　繁「西アジア・データベース形成のための基礎的研究」：基盤研究(B)(2)

アラビア・ペルシャ・トルコ語文献などを中心に西アジアに関する人文学系の研究資料のデータ・ベースを構築するために，基礎資料の集積と整理，機械入力に係る基盤整備のための基礎的研究を行う。

1998年度320万円　1999年度320万円

鈴木　董「日本とトルコの近代化とその歴史的諸前提の比較研究」：基盤研究(B)(2)

日本とトルコは，アジアの諸社会の中で，いずれも政治的独立を保ちつつ近代国民国家を形成した点で多くの類似点を有するとともに，文化的伝統と歴史的背景において大きな相違を示す。トルコ側と日本側の研究者の共同作業に基づき，日土の近代化の歴史的諸前提を新たな視点から比較しつつ解明することをめざす。

1999年度400万円

松井　健「アジア・オセアニア・アフリカ地域における自然とかかわる文化的プラクシスの通文化的研究」：基盤研究(C)(1)

アジア・オセアニア・アフリカ地域の人々が，自然とかかわって行う多様な行

動やイデオロギーを文化的プラクシスとしてまとめて考察し，それらを比較するために，一年に数回二日間程度の研究会を開催し，一回三〜五題の報告について徹底的に議論している。

1998年度120万円　1999年度110万円

池本幸生「東南アジアの経済危機と所得分配・貧困に関する研究」：基盤研究（C）（2）

1997年にタイから始まった通貨危機は東南アジア全域に波及し，タイやインドネシアなどでは大幅なマイナス成長に陥り，貧困状態は悪化してきていると言われる。本研究は，このような東南アジアの所得格差と貧困の現状を所得分布統計に基づいて明らかにすることを目的とする。

1999年度190万円

髙橋昭雄「市場経済体制移行下のミャンマー農村の変容に関する社会経済的研究」：萌芽的研究

高橋自身が調査したミャンマーの農村5カ村の世帯別経済調査表をエクセルのワークシートに入力してデータベース化した。これを基に市場経済化の中で村と村人たちの社会生活がどのように変化しているのかについて研究を進めた。

1998年度60万円

鈴木隆泰「Stog Palace写本を用いたチベット典籍の史的系統調査」：奨励研究（A）

Stog Palace，Tokyo両写本を対象に，異読を比較校合することによって両者の歴史的・文献的距離を測定し，チベット大蔵経のcritical edition確定のための基礎資料を作成する。

1998年度50万円

菅　豊「周辺的生業からみた自然観・労働観に関する環境民俗学的研究」：奨励研究（A）

経済的に看過されやすい伝承的マイナー・サブシステンスを題材に，環境への負荷を軽減させる生業のあり方を検討する。

1998年度120万円　1999年度100万円

吉開将人「銘文データベース作成による中国秦漢時代青銅器の生産と流通に関す

る研究」：奨励研究（A）

中国各地で大量に出土し，蓄積されている秦漢時代の青銅製品のうち，印章など銘文をもつ資料について集成し，文字資料と考古学データの両面から，経済および制度史的諸問題について解明しようとするものである。

1998年度100万円　1999年度100万円

田中明彦「戦後日本政治・外交データベース」：研究成果公開促進費（データベース）

日本の内政・外交ならびに国際関係にかかわる重要な政治文書などの全文テキストをデータベース化し，インターネット上で公開すること。

（参照 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/dababase/speech/）。

1998年度316万円　1999年度284万円

丘山　新「東洋文化研究所所蔵漢籍目録データベース」：研究成果公開促進経費（データベース）

東洋文化研究所所蔵漢籍約5万点の目録データベース作成。本格的なものとしては，日本で最初のものとなる。

1998年度1,433万円　1999年度1,216万円

尾崎文昭「中国近現代文学関係雑誌目次データベース」：研究成果公開促進費（データベース）

中国近現代文学研究関係の中国発行研究誌の文献データベースを作成する。中国語文字でデータを入力し，本研究所のホームページで公開する。

1999年度208万円

宮嶌博史「日本所在近代朝鮮関係書籍データベース」：研究成果公開促進費（データベース）

日本国内に所蔵されている近代（1868-1945年）朝鮮関係日本語書籍の書誌・所在情報をデータベース化し，公開する。

1999年度365万円

羽田　正「現代イスラーム世界の動態的研究」研究班5「イスラームの歴史と文化」：創成的基礎研究費

全部で6研究班からなる上記研究組織の一つの班の代表として，研究プロジェ

クト全体と班研究の企画運営にあたった。
1999年度1,400万円

中里成章「南アジアにおける国民統合と政治・経済システムの形成――変革の90年代からの再検討」：国際学術研究（学術調査）
南アジア諸国は現在大転換期にあり，その激動の中で国民国家形成期に創り出された制度や価値観が厳しく問い直されている。本調査研究はこのような現状を踏まえて，南アジアの政治・経済システムの形成過程を再検討することを目的とする。
1998年度290万円

関本照夫「経済発展下の文化創造－東南アジア地域工芸産業の現代的発展の総合的研究」：国際学術研究（学術調査）
東南アジア4カ国（インドネシア，ビルマ，タイ，ラオス）における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例について，現状，歴史的背景，今後の発展の可能性を，文化人類学，経済学，美術工芸の視点を合わせて現地調査。
1998年度840万円

4. その他の経費による研究・調査

原　洋之介：順益台湾原住民博物館　林迺翁文教基金会
1996・97年度末成教授が実施された研究を引きつぎ，日本における既住の台湾原住民研究を整理すると共に，現地調査を行い，その公刊を通じて広い意味での現地還元をはかっている。
1999年度500万円

関本照夫「経済発展と文化創造：東南アジア地域工芸産業の総合的・国際共同研究」：トヨタ財団
東南アジア4カ国（インドネシア，ビルマ，タイ，ラオス）における染・織その他の地場工芸産業の幾つかの代表的事例について，現状，歴史的背景，今後の発展の可能性を，文化人類学，経済学，美術工芸の視点を合わせて現地調査。

加納啓良「経済発展過程における都市・農村関係の変容」：国際協力事業団長期

派遣専門家現地業務費による研究

ジャカルタ郊外デポック市と東京の多摩ニュータウンを事例とする，日本とインドネシアの首都圏住宅都市社会の比較研究を，インドネシア現地滞在中に実施した。

長澤榮治「日本学術振興会カイロ研究連絡センターの運営に伴う調査」

日本学術振興会カイロ研究連絡センターの新事務所移転に伴う諸事業に従事する一方，「現代エジプトの社会変容」を研究課題にして湾岸戦争後の政治経済変容を背景に変化しつつある社会問題とNGOなど社会運動の実態を調査し，併せて社会運動史に関する聞き取り調査を行った。

羽田　正「新発見シャルダン文書の研究」：三菱財団人文科学研究助成

イエール大学貴重書図書館に収められている「シャルダン関係文書」に関する研究。フランス生まれのユグノー宝石商人で，ペルシャに関する浩瀚な旅行記を書き残したジャン・シャルダン（1643-1713）が，インドのマドラスで商売を営む弟夫婦に送った手紙を含む大量の文書類の整理，公刊を目的とする。

1998年度～2000年度　360万円

菊地達也「イスラム世界の虚像と実像」：NIRA委託研究

パキスタン，インドにおけるイスマーイール派の活動を調査し，同派のロンドンにおける研究機関で研究活動を行った。

総額　52万円

F　国際・国内学術交流

1. 交流協定

香港大学アジア研究センターとの学術交流協定

本研究所が交流拠点の役割を果し，東京大学の海外学術研究拠点を強化する一環として，1995年10月本研究所は香港大学アジア研究センターとの間に交流協定を結び，共同研究を開始した。協定の内容は，(1)共同研究の推進，(2)研究者の交流，(3)資料・研究情報の交換の三項からなる。

(1)アジア研究ネットワークの形成，(2)アジア研究情報センター設立プロジェクト，(3)珠江デルタ，新界，香港の社会変化の比較研究，(4)中国の経済発展と企業家，(5)香港社会史，(6)香港の選挙制度と政治意識の変化，などがあり，それぞれに，資料調査，現地研究，国際ワークショップなどが進められている。

中国・復旦大学との学術交流協定

東京大学と復旦大学との間における学術交流協定は，1991年10月に結ばれた。この協定の運用は，東京大学では，これまで理学部が担当部局であったが，1996年に更新期限となり，その後東洋文化研究所が担当することとなった。交流の内容は両校間における(1)教官，研究者，院生，学生の交流，(2)共同研究の計画と実施，(3)講義とセミナーの実施，(4)学術情報及び学術刊行物の交換，などである。

東洋文化研究所では，すでに，個々の共同プロジェクトで復旦大学と研究交流を進めてきたが，今後，大学間交流を担当するに際し，より多角的・総合的な交流を進めていきたい。

シンガポール国立大学社会学部

1997年4月に，シンガポール国立大学社会学部と5ヵ年間の学術交流協定を結んだ。この協定は，研究者の交流と研究資料の相互交換を主要な目的とする。特に，この協定は，香港大学アジア研究センターの協定と同様に，当研究所の長期計画研究「環ベンガル湾」を効果的に行っていくために，非常に重要な役割を果すものとして位置づけられている。主としてインド世界と東南アジアとの関連に焦点をあて，経済，政治面での交流だけでなく，思想・文化の相互連関についての研究をすすめている。

タイ国・カセサート大学経済経営学部との学術交流協定

1995年3月から5ヵ年に渡り，タイ国カセサート大学経済経営学部との間で学術交流協定を実施してきた。この間，研究者の相互交流の面でそれなりの成果をあげえた。新しい構想の下でに協定内容を変更させる意図で，2000年春以降への協定の更新は一時停止することにした。

2. 外国出張（1998・99年度）

研究所スタッフの外国出張の件数は，1998年度89件，1999年度85件であった。国別・期間別の数字は以下の通りである。

一か月以上		一か月未満			
国　名	人数	国　名	人数	国　名	人数
インド	3人	中華人民共和国	30人	ロシア連邦	2人
中華人民共和国	3人	アメリカ合衆国	28人	イラン	1人
タ　イ	3人	台　湾	23人	ウズベキスタン	1人
インドネシア	2人	シンガポール	14人	エジプト	1人
エジプト	2人	イギリス	12人	オランダ	1人
フランス	2人	タイ	9人	スイス	1人
イギリス	1人	インド	8人	スウェーデン	1人
イタリア	1人	香　港	7人	スペイン	1人
ウズベキスタン	1人	イタリア	4人	スリランカ	1人
カナダ	1人	インドネシア	4人	トルコ	1人
スペイン	1人	ドイツ	4人	ブラジル	1人
トルコ	1人	オーストラリア	2人	ベトナム	1人
パキスタン	1人	オーストリア	2人	ペルー	1人
ベトナム	1人	カンボジア	2人	ポルトガル	1人
		デンマーク	2人	マレーシア	1人
		フランス	2人	ミャンマー	1人
		パキスタン	2人	モンゴル	1人
		フィリピン	2人	ルクセンブルグ	1人

3. 外国人研究者等の受入れ（1998・99年度）

氏名・所属・身分	期間	研究課題
陳 國 球 （香港科学技術大学人文学）	1998. 4. 1 ～98. 5.30	日本の中国研究と中国の文学研究
Anne Reinhardt （プリンストン大学歴史系・博士候補生）	1998. 4. 1 ～98. 6.15	19世紀後半—20世紀初頭，長江における蒸気船の役割
馬 俊 威 （現代国際関係研究所・副研究員）	1998. 4. 1 ～99. 3.31	日本政治と中日関係
Qian Jinbao （ハーバード大学・博士候補生）	1998. 5. 6 ～99. 4.30	汪精衛政権（1940-1945）について
Lily Kong （国立シンガポール大学・教授）	1998. 5.29 ～99. 6.27	移転・適応・交渉—日本におけるシンガポール人のアイデンティティイ
姜 聲 鶴 （高麗大学校政経学部政治外交学科・教授）	1998. 6. 1 ～98.12. 1	日露戦争外交史
Liu Hong （国立シンガポール大学・講師）	1998. 6. 8 ～98. 6.23	シンガポールと日本における中国企業グループの社会的・商業的ネットワークの構造とその変化
黄 子 平 （香港バプティスト大学文学院中文科・助理教授）	1998. 6.25 ～98. 8.10	1980-90年代中国の文学と思想についての研究
Sanjay Seth （ラ・トローブ大学政治学部・上級講師）	1998. 7. 1 ～98.12.31	植民地インドにおける教育と政治
劉 士 永 （中央研究員台湾史研究所・研究助理）	1998. 7. 1 ～98. 7.31	戦前日本における台湾医学関係書目研究
陳 弱 水 （中央研究院歴史語言研究所・副研究員）	1998. 7.15 ～98. 8.15	唐代の文化と仏教思想
Matthew M. Chew （香港中文大学教育学部・助教授）	1998. 7.20 ～98. 9.15	知識の創世と国際文化関係
祁 建 民 （南開大学歴史系・助教授）	1998. 7.24 ～99. 7.23	1930-40年代蒙疆政権研究
Purnendra Jain （アデレイド大学アジア研究センター・所長）	1998. 8. 1 ～98.10. 7	現代日本の対外政策
黄 源 盛 （国立政治大学法律学系・専任副教授）	1998. 8. 1 ～99. 7.31	外国法の継受と中日両国に於ける法律近代化の比較
金 熙 徳 （中国社会科学院日本研究所・副研究員）	1998. 9. 1 ～98.11.29	21世紀に向けての日本のアジア太平洋政策の変化の趨勢
金 瑛 河 （成均館大学校史学科・教授）	1998. 9. 1 ～99. 2.28	新羅中代王権の基盤と志向
朴 炳 光 （復旦大学國際政治系・博士候補生）	1998. 9. 1 ～99. 7.31	現代中国における地域格差
笵 燕 秋 （国立台湾政治大学・博士候補生）	1998. 9. 1 ～99. 2.28	近代国民医学と植民—日治時期台湾の保健衛生
Sepulveda, Danielle Cristina （オックスフォード大学・博士候補生）	1998. 9. 1 ～99. 2.21	ビルマからタイへの非合法移民
Dodds, Shona Elizabeth Helen （オーストラリア国立大学太平洋アジア研究大学院平和研究センター・博士課程）	1998. 9. 1 ～99. 2.21	冷戦後の米国外交政策における国連の役割